



短編幻想小説

# 異形

## 連続掌編小説『異形』の御説明とかあらすじとか

---

### 小説『異形』の御説明

美少女と冴えない中年男の恋物語です。実際のところ、かなり、無理のある設定ですので、幻想だとか、ファンタジー等の手法を用いています。その上、美少女が中年男の夢中であるというありえない設定を採用しております都合、かなり無理な進行もしております。ただ、まっ、私も、吹けば飛ぶようなつまらない中年男。存外、楽しんで書いています。

ただ、案外、お話が続いてしまい、途中からだと設定がよくわからないと思いますので、まずは下記の御説明をご覧くださいただければと存じます。

#### [『異形一話から十話』 http://p.booklog.jp/book/4249](http://p.booklog.jp/book/4249)

魔物に囚われていた美少女を中年男が救い出し、父娘として暮らすことになります。このように書くと、もう、この部分だけで犯罪ですね。

男は少女が普通に生活していくことが出来るように、近くにある商店街のおばさん達と交流させます。男も少女を自分の娘と認識し、自分がいなくなった後も、彼女が生活が出来るようにと努めていきます。

#### [『異形 流堰迷子は天へと落ちていく』 http://p.booklog.jp/book/4337](http://p.booklog.jp/book/4337)

十話にて男と娘が街を追いやられた後、一年ぶりに帰ってきたところから話は始まります。そして「異形三話」にて登場した、あかねが再登場、また、娘が男の右腕を斬り落としてしまったりと、不穏な展開になります。この辺から、少し戦闘物語になりだしました。

#### [『異形 雨夜閑話』 http://p.booklog.jp/book/4783](http://p.booklog.jp/book/4783)

途中から鬼との戦いが始まります。また、妙な縁から、猫又三人娘が同居を始めます。娘は、その三人の母親となります。後半からは、猫又三人娘が、話の展開の中心になっていきます。

#### [『異形 月の竹、眠るモノ』 http://p.booklog.jp/book/19010](http://p.booklog.jp/book/19010)

2011年1月22日現在、このお話がどうなるのか、ほぼ、気分で書き綴っているため、まったく先が見通せていません。

## 天想・遙の花 一話 異形一話より改題

---

深夜の街を一人の男を背負った、裸の女が歩く。

雨が降りしきる人通りの絶えた街。

よろよろと倒れそうになりながらも歩き続ける。柔らかな部屋の中でしか歩いたことのなかった女の足は既に血だらけとなり、それでも、齒を食いしばり耐え続ける。

濡れた髪が女の顔を隠す、しかし、微かに覗くその口元には荒れる息と共に笑みがあった。

息が出来ない、心臓がどくどくする。

ああ、私は生きているんだ。

私に生命を分けてくれた人、この恩、いま返します、これが私の約束。

「この部屋か・・・」

男はマンションのとある部屋の前で立ち止まった。

表札はない、本来、このマンションは入り口で居住者の部屋番号を押し、中からドアの鍵を解除してもらわねば入ることができない。居住者だろう、暗証番号を押し入るのをそのまま続いて入ったのだ。

人の世の無関心はありがたい。

背広の下、腰に隠した小刀を服の上から押える。

なんとかなるか。

三世代、父、祖父と、長い年月をかけ、一つの仕事を成し遂げようとしてきた。

それが男の代で成し終える、男の表情にはそんな緊張感があった。

ブザーはない。軽くドアを叩いてみる。

ひとりでに、ドアが開きだした。

「どうぞ、入ってくださいーい」

女の声、いや、子供の声にも思える。

廊下、贅をこらした金細工、壁、天井、床下まで、臙脂色のカーペットが敷き詰められ、時代的なシャンデリアの光りになにやらアラビア風の金文字が鈍く輝いている。

意味があるのか、それとも装飾的なものなのか。廊下の先は薄く朱を差した薄絹で隠され、その向こうは見えない。

声はその薄絹の向こうからした。

「靴はどうしたらいいのかな」

「そのまま大丈夫ですよ、どうぞ」

典型的庶民の男には、カーペットの上を土足で歩くことをためらわれたが、さぼど、靴底が汚れていないのを確認し、奥の部屋へ向かう。

薄絹の前へ立ち、もう一度、立ち止まった。

「いいですか」

「どうぞ、お入りください」

薄絹をたくしあげ、部屋の中に入る。二十畳は充分ある。臙脂が部屋全体を包み込み、天井にはきらびやかなシャンデリア、贅をこらしたマホガニーの調度品の中央にダブルベッドが設えられ、上半身をベッドから起こした女性が笑みを浮かべていた。

胸を掛け布で隠しているが肩の線、肌が白く見えている。

十代か、大人になりきっていない顔。

「ようこそ。桜倶楽部へ」

くすぐったそうに、笑顔を浮かべ言う。

男は戸惑ったように、ど、どうもと口の中で答えた。

「どうぞ、靴を脱いでベッドに入ってくださいな。お服は斉女（ときめ）が脱がしてあげますね」

「あ、いっ、いや、その・・・」

男はベッドの隣りにある木製の椅子を見つけると、その椅子を引き寄せた。

「おじさんね、ちょっと、そういうの、得意じゃなくてね、椅子でもいいかな」

「おじさま、なんだか、可愛い」

男は恥ずかしそうに笑うと、椅子に腰を降ろした。

「おじさまは桜倶楽部のシステムをご存じ」

「癒しの空間、そう聞いて来ただけ」

女はにっこり笑顔を浮かべると、男に顔を寄せた。

「おじさまはお疲れ」

「え、あ、うん」

「そんな、おじさまを癒すのが斉女（ときめ）のお役目」

「それって」

「援助交際や愛人なんかとは違うんだよ、お金は目的じゃない」

「それはお金儲けではなく、本当に男性を癒すことが目的っていうこと」

女はその姿勢のまま頷いた。

「たくさん疲れた人達がいる、そんな人達が少しでも心癒されればそれでいい、足つぼマッサージとかあるでしょう、私的にはそんな感じの発展形かな」

女は姿勢を戻すと、男を静かに見つめた。

男は少し戸惑いながらも椅子を少しベッドに寄せ女を見つめた。

「君をどうこうしようというのは、おじさんの道徳観がどうしても許さない。それに多分、おじさんは君と話が出来れば、君みたいな素敵な娘と少し会話とでもいうのかな、そんなやり取りが出来ればとても楽しい、だから、しばらくの間、話し相手になってくれるかな」

「おじさま、良い人だね」

女は少し小首をかしげ、笑みを浮かべた。

「おじさんに、ここを紹介してくれたお爺さんは、とってもお金持ちで、とっても権力を持っていて、その二つを足しても補えない孤独な人だった。十日前に来た、お爺さんのこと、覚えてないかな」

「良く覚えている、心に一杯傷を持っていた人」

男は頷くと所在無げに両手を組み、そしてまた、手を離した。

「二日前に亡くなった。不思議な亡くなり方だった、君は・・・」

女は笑顔を浮かべたまま、涙を流していた。

「どうしてかなあ」

女が囁く。

「おじさまみたいにとても紳士な人で思いやりのある人だった、最初は恐かったけど、本当はとっても優しい人だった」

女は膝に顔を埋め泣き出した。透き通る白い背中、細いうなじ、肩が震える。男は意を決したように、手を伸ばし、少しぎこちない手つきで、女の頭をなでる。

「本当に泣いたのは君だけだろう、きっと、喜んでいるよ」

男は手を戻し、話し続けた。

「ただ、変な亡くなり方をしたんだ、おっちゃんも、直接見たわけではないけど、お手伝いさんや家族が何人も居る中でそれが起こったんだ、お爺さんが氷が溶けるようにして消えたんだ、人がまるで溶けるように」

涙の跡を残したまま、きょとんと男を見た。

「溶けるように」

「そう、話によると、氷が溶けるようにして消えてしまって、骨一つ、残らなかつたらしい。おじさんは何があったのか、はっきりさせたくて、この一カ月分のお爺さんの足取りを追っている。それで、いつだったか、こういうところがある

らしい、君も行ってみるかって、桜倶楽部のことだけれど、聞かされていたのを思い出したんだ、そして、調べると、どうやら、十日前に実際にお爺さんが行ったらしいということがわかってね、今日、ここへ来たんだ」

「ここでは名前を聞かない、聞けばその人が気掛かりになって、私の心が保てません、だから、本当のことを言うと、たくさんの人達のこと、あまり覚えていない。でも、あのお爺さんはおじさまと同じように椅子に座っているんな話を聞かせてくれました。私はそのお話を聞いているだけで、時々、ちょっと相槌を打つだけだったんだけど、それでも、とても嬉しそうに笑ってくれていた」

女は膝に顔をうずめた。

「家の人達は大変、なんせ、消えてしまったわけだから、亡くなったことを証明できない。遺産相続にもめている、何とかな、本当に嘆いてくれる人が一人でもいてくれたこと、友人として嬉しい」

男はそう言うと女の頭をなでる、それが男の精一杯の表現だった。

「お願い、手を握っていてくれませんか」

女が右手を差し出す、男は少し戸惑いながらも、その手を握った。柔らかい手だった。

「ごめんなさい、そうじゃないと、私、何処かに流れてしまいそうなの」

女は口をつぐみ、少し顔を上げ天井を見上げる。男は本当にそのままベッドが舟になって女が黒い海をあてどなく流れ出していくような気がした、両手でしっかりと女の手を握る。

「自分を見失ってははいけません」

男は女の耳元へ顔を寄せ、囁いた。

「この両手はどんな闇に君が流されて行ったとしても放すことはありません、君が現世（うつしよ）に戻るための道筋となるでしょう」

女はほっと息をつく、男に向き直った。

「闇の中、おじさまの声、聞こえた。ありがとう」

男は少し笑顔を浮かべると手を放しかけたが、くっと女が男の左手を握り返した。

「約束です」

女はにっこ笑みを浮かべた。

「おじさまは普通の人じゃない気がする」

「普通の人ですよ、零細個人自営業者 税理士です、他人のお金を計算をしています」

「本当にそれだけ」

「あとは休みの日に人探しをやっていたり」

「探偵さん」

男は顔を横に振り、少し困ったように笑った。

手を重ねたまま、男は背もたれに背中を預けると、一つ、小さく吐息をついた。

「たいして面白くもない話ですが、聴いてくれますか」

「喜んで」

「おっちゃんのおじいさんは呪い師でした、占いや行方不明の人を見つけることで生計をたてていた。特に行方不明の人を見つけることに関しては一番の得意、明治初めの頃の、価値観が急激に変わった時代、社会も大きく変化して行く。そんな時代には人がいなくなってしまうというのは特に珍しいものではなかった」

「おじさまは、映画や小説に出てくる陰陽師という人達なの」

女は不思議な笑みを浮かべた。

「やっていることは似たようなもの、全くの別系統だけどね」

「おじいさんは唯一、一人の行方不明者を除いて全ての人達を見つけだした。もちろん、それは生きて見つかった場合もあればそうでなかったこともある、ただ、とにかく三日と開けず捜し当てた。問題はその見つからなかった一人」

「唯一の汚点ということ」

「汚点というか、心残りだったんだろうね、家族にその人を返せなかったことが。それで、長男だった、おっちゃんのお父に残した遺言が、お前がその一人を見つけだしてくれということ。ただ、父親も見つけられなくてね、話がおっちゃんに回ってきたわけ。ただ、仕事もあるからね、休みの日に探しに回っているだけだけど」

「あの」

「ん」

「明治時代からなら十分に百年以上経っていると思うけど」

「普通に考えれば既に生きていないってこと」

女は男の言葉に頷いた

「普通ならね。ただ、親子三代かけて探そうというのは彼女がまだ生きているから」

「彼女、女の人」

「そう、例えば、君とか。陰陽師、辺りから少し君の気配が変わってきていた」

「私、そんな齡じゃないですよ」

女がくすぐったそうに笑う。

「祖父、父と、時代を経るごとに、この身にある呪の力は弱まってしまったけど、今のおっちゃんなら、まだ、君を救い出すことができる、どうする」

「要らぬこと」

低く軋みのような声が女の口から漏れる。

「噂には聞いたことがある。呪文を唱えぬ呪い師がいること」

掛け布に隠れた女の下半身が足の形から膨らみだし、一抱えもありそうな丸太のように膨れ上がる。

男は右手で掛布を捲り上げた。

まるで肉食動物の舌のようだ、男は声に出せず、口の中で呟いた。

ベッドはまるで分厚い肉感のある赤黒い舌に変じ、女の上半身がその中から生えていた。

「なるほど、女性を餌として、そして、自身の発声器官として利用しているわけですか」

「脂ぎった男は堅いが旨い、噛めば噛むほど味が出る、年寄りはやぶって精気だけ吸い取り帰してやるがな」

床に壁、天井までが蠢き出した。

「なるほど、既に口の中か」

「我らの存在を知る者は、いずれ阻害要因となる、骨も残さず食ろうてやろう」

女の手が放れ、これは蛇の舌、舌先がちょろちょろ動くように女の体そのものが上へ下へと動き出す。

「しかし、まあ、現実に、こういう事態に自分自身が在るとするのは驚き」

女は宙に浮いたまま男の前に顔を寄せた。

「お前の落ち着いた顔には反吐が出る」

「いけません、女の子がそんな言葉遣いをしては」

男は笑みを浮かべると、とんと女の額に人差し指で触れた。

女の顔が元の表情に戻り、自我を取り戻した。

「おじさま、ごめんなさい」

「早く逃げて、入り口へ・・・」

男は瞬間、身を伏せると、腰から短刀を抜き、女の足先をかき切った。

落ちてくる女を抱きとめる。抱きとめたまま、ドアへ向かって駆け抜ける。蠕動する壁を天井をかき切り、ドアを蹴破った。

振り返る、半開きになったドアの向こうで赤黒い肉の塊が所狭しと動いていた。

ドアが閉まっていく。女の足に絡み付いていた肉の塊も消えてしまった。

「ここを去ったということか」

男は女を抱え直すと、仰向けにし、胸に耳を当てた。

心臓の音はしない。

「ごめんなさい、私はすでに人ではありません」

女は少し疲れたように笑みを浮かべた。

「ほら、指先も」

女の指先の色が薄れていく。

まるで消えて行くようだ。

「君はこのまま消えて行くのか」

「はい。罪を償うこともなしに」

「君に罪はない」

「いいえ、あのおじいさんを始め、たくさんの人達の顔が浮かびます、たくさんの人生を狂わせてしまいました」

「君がそれを言うなら、俺の命、半分やろう。生きて、しっかり考えなさい」

いきなり、男は自分の左手小指を小刀で切り落とした。

男の顔に一瞬、苦痛が走る。しかし、すぐに笑みを浮かべると小指を女の臍の上に載せ、流れる血をその上に垂らした。

「小指は約束の指、君に生命を与えましょう。そして、おっちゃんの血と肉と元気（がんき）を受け入れなさい。生きることを選びなさい」

男の小指が女のへその上で溶け、血と共に女の体に溶け込んでいく。

女は痛みにくっと唇を噛んだ。

「熱いですか、痛いですか」

「いいえ・・・」

「これから君の体の内部で、全ての細胞が人の体の細胞に入れ替わっていきます。それは体を燃やす痛みと熱さを上回るでしょう。歯を食いしばって我慢しなさい。苦痛を乗り越え、こちら側へ帰ってきなさい。おじさんは君を待っていますよ」

情けないことに俺は意識を失い、三日間寝込んだらしい。それは元気（がんき）を減らしたせいかも知れない。

男は左手を、小指のない左手を見た。これでもかと包帯を巻き付けてある、あの娘が泣きながら震える指先で巻いてくれていた。

指を切る、こんなに痛いものだったと初めて知った。

男は布団から立ち上がり、テーブルにつく。少しふらつくがすぐ元に戻るだろう。

「しかし、記憶までとは」

男の記憶の一部が血と共に女に入り、家への道筋を女に教えた。女は男を背負って、よろよろと家まで帰り着いたのだった。

「夜とはいえ・・・。そうだな、これは、逆に助けて貰ったのかも知れない」

「おとうさん、まだ寝ている方がいいよ」

女が男のシャツを着、テーブルの横に立っていた。心配そうに男の顔をのぞき込む。

一緒に暮らすなら、年齢的にも父娘でいいでしょうと、男が提案したのだった。

「もう大丈夫ですよ、少し動くくらいの方がいい。それに」

「え」

男は笑みを浮かべた。

「服を買いに行こう、その服装はさすがにね、ちょっと、あれだ」

女も笑みを浮かべた。

「ありがと、おとうさん」

-- 2 --

「うわあぁっ、お父さん、お父さん、お父さん」

女の悲鳴に男が駆けつけた。男の税理士事務所兼自宅の一室での出来事だった。

女はぶるぶると震え、部屋の片隅にうずくまっていた。

「大丈夫、もう大丈夫」

男は女を抱き締めた。

「お父さん、お父さん、お父さん、どこ」

「ここにいる、ここにいるよ」

女の荒い息が少しずつ収まり、震えが止まる。泣き濡れた眼差しで男を見上げた。

「ごめんなさい、また、私、おかしくなってしまうて・・・」

「大丈夫、安心しなさい」

あれから、一カ月が経った。記憶の一部が流れ込んだせいもあるだろう、日常生活に当たり前のように対応する、いや、仕事まで手伝うことができるのだから、それは驚くほどだ。しかし、これで三度目だろうか、急に叫びだし、うずくまる。

百年以上の心の傷が、一カ月やそこらで癒えるはずはない、いや、完全に無くなることはないかもしれない、日曜日の朝に限ってこうなるのは、平日の人の出入りの慌ただしさに必死に自分を抑え込んで耐えているのかもしれない。

男は床に座ると女に笑い掛けた。

「ここは君の家です。ほら、ここからでいい、窓の外を眺めてごらん。秋、今日は少し暖かな小春日和。窓を開ければ、梢を通り抜けた穏やかな風が流れ込んでくる。これは、今までも、今も、これから先も、君のもの。ゆっくりと受け入れていきなさい、これを自分自身の宝物と認めていきなさい」

「お父さん、私なんかが、そんなに幸せになってもいいのかな」

「君は幸せになっていいんだ、そして、君が幸せになることが父さんの一番嬉しいことなんだからね」

男は女を仰向けにだきかかえ立ち上がった。女がぎゅっと男の首にしがみつく。

「お父さんと一緒にいると嬉しい」

「それは光栄なこと」

男はそのまま、窓により、外を見る、青い空、秋の遠い空だ。

「窓を開けてごらん」

女が、そっと手を伸ばし、窓を開ける。途端、やわらかな風が流れ込んできた。

「今日は暖かそうだね」

女がすううっと息を吸い込んだ。そして、ゆっくりと吐く。

「少し甘い」

「これは老梅の香りだな。時ずらしの結界の所為で少し花の時期が狂ってしまうんだ」

男は少し笑うと、抱きかかえたまま、台所へ。女をテーブルにつかせると、冷蔵庫から牛乳を取り出した。

「マグカップ、二つ、戸棚から出してくれます」

「う、うん」

女が立ち上がり戸棚を開けている間に、小さな片手鍋を男は取り出した。

「これに牛乳、マグカップ二杯分とちょっとを入れて、火に掛けてくれる」

「わかった」

女がいそいそと小鍋に牛乳を入れ火に掛ける間に、男は紅茶の缶と砂糖とシナモンを取り出した。

テーブルに二人つき、チャイを飲む。日曜の朝一番、ほっと一息。

女は両手でマグカップを持ち、少し啜る。

「お父さん、こんな私のこと、嫌いにならない」

「ん、そんなことない、好きですよ」

「私もお父さんのこと大好き」

女はにっと笑顔を浮かべると、少し恥ずかしげに俯いた。

男はこういう状況になるとは想像していなかったが、生命を分けたあの瞬間、自分はこの子を守り続ける責任が生じたのかもしれないと考えた。これは親という者の気持ちに近いのかもしれない。長く一人で生きて来たこともあり、戸惑うこともあるが、確かに楽しい。しかしと男は考えた。

自分が何かで死んだ時、この子は一人で生きて行かねばならない。金銭的に困らせるようなことはしない、ただ、ああいった魔物は大勢いる、いつかは自分自身で対処して行く必要があるだろう。

「今日は出掛けましょう」

「うん、何処へ」

「今までのこと、お墓へ報告に。それで、ひとつ、けじめをつけましょう。それから、君に武術と呪術を教えていきましょう」

「武術と呪術」

女は表情を引き締めた、男の思いが伝わったのだろう。

「今度は私がお父さんを守りたい」

男は少し笑うと、女の頭をなでる。

「良い子に育ちました」

山の中程にある集落、その外れにある墓地、最初に出かけた墓は、女の両親や先祖の眠る墓だった、女は桶に入れた水を柄杓に取り、墓石に流しかける。そして小さなタワシで洗い始めた。

山の斜面に作られたこの墓地は、今の時間、ちょうど日差しが差して暖かい。見下ろせば遠くに町が見える。

明治の頃なら、本当にここは山奥の村だったのだろう。ここで君はどんな風景を見ていたんだ、そう心の中で問うてみる。それはなんて、罪な問いかけだろうか。

「足りるかな、水を汲んで来ましょうか」

「ううん、大丈夫」

女は振り返り、笑顔を浮かべた。

「それに一人になるのが怖い」

「そうだね」

掃除を済ませると、女は黙ったまま手を合わせる。

どれほどの思いが込められているのだろう、身じろぎひとつせず、両手を合わせている。

男も女の後ろで手を合わせた。

「お父さん」

女が振り向く。

「どうしました」

「教えて欲しいことがある」

「どんなこと」

「本当のことという、私、何も思い出せない、誰も思い出せない。なんて、私、酷い奴なんだろう」

「君は」

「両親のことも兄妹のことも友達のこと何も思い出せないよ・・・」

女の手が震えていた。ぎゅっと唇をかみしめ涙の流れるのを抑え込もうと俯く。

男は女を抱き締めた。

「君が悪いわけじゃない、辛くて、哀しいことだけれど、それは決して君が悪いことではない。自分を責めないで」

男は女を座らせると、その横に座る、墓を背にし、青い空の下、遠く町並みが見える。

「思い出せないのは君の中で君自身が思い出させないようにしているからだろう」

「どうして」

「心が壊れてしまわないため」

男は女の手をしっかりと握った。

「その時のこと、両親のこと、思い出せば君は正気を保てない」

「どうしてそう言い切れるの」

「それは父さんがその情景を見て、経験して苦しんだから」

「え・・・」

「あのとき、君の中に父さんの記憶が少し流れ込んだらう」

「うん」

「あれは予想外のことだったけど、血の継承で記憶をね、引き継ぐことができる。祖父が自分の

代では君を見つけることができないと観念した時、父にね、君に関する記憶すべてを継承させた、そして、父さんはさ、父からその記憶を継承した、それはまさしく、自分自身が体験するようなものだった」

「お願い、教えて欲しい」

「今は無理、教えられない、君が一人の人間として自立できるようになるまで待つて欲しい」

「お父さん、泣いているの」

男は唇をかみしめ、その眼から涙が流れだしていた。

「まさか、この齢になって泣いてしまうとはね、情けないな」

「ごめんなさい。私、自分のことばかり」

女は呟くと、努めて笑顔を浮かべた。

「私にはこうしてさ、大事なお父さんがいてくれるから、もうそれ以上は何もいらぬよ」

男はそっと女を抱き締めた。

君は真実を知った時、本当に正気を保つことができるだろうか、もう一度、笑顔でこの地にやって来ることができるだろうか。

それから、二人は男の父親と祖父の眠る墓へと向かう。男はようやく女を見つけたこと、そして、彼女を娘にしたことを伝えるつもりだった。

二つの墓を回り、その帰り、街のオープンテラスのレストランで早目の昼食をとる。たくさんの行き交う人達、賑やかなひとときだ。

「お父さん、あのね」

「どうしました」

「私の名前だけど」

あ、と男は気づいた。男はいつも、女を「君」と呼んでいた。何やら、気恥ずかしく、どうしても、「君」と呼んでしまっているのだった。

「お父さん、私に名前を付けてほしい」

「名前を」

「私はまだ情けないくらい不安定だ。お父さんという今も、こうしている今も、ひょっとして夢なんじゃないか、私はまだあそこにて・・・、そう思うと胸の奥がきゅっと痛くなる、そして、息が出来なくなる」

「そうか・・・、気づいてやれずにごめんね」

「違う、違うよ。お父さんは悪くない、私が私が・・・。ごめんなさい」

「今日一日、ごめんなさいは禁止。いい」

「うん」

男は笑顔を浮かべると、一口、珈琲を飲む。

名前を付けるのは難しい、特に呪術の世界に片足突っ込んでいる人間にとって、名前を付ける、名前を告げるは危険と隣り合わせだ。しかし、名前を付けること、それは存在する証しともなり

得るものだ。彼女には今、彼女自身が安寧でいるためにも名前を必要としているのかもしれない。

「わかりました。二つの名前をあげましょう」

「二つの」

「そう、一つは本当の名前、もう一つは普段の名前。こっちにおいで」

女は立ち上がると男の前に立った。男は椅子に座ったまま、女を見上げる。

「両手をこちらに」

男も両手を出すと、女の手首をしっかりと握った。

「少しかがんで、額を出して」

男は女の額に自分の額を重ねた。

「私達の技は呪を唱えません。ただ、強く意念を用いるのみ」

男が息を吐く、瞬間、女の体が吹き飛ばされるように浮かんだ。男が手を握っていなければ女は確実に飛ばされていただろう。

「いま、君の心の奥底に本当の名前を刻印した、わかるかな」

「うん、わかる、不思議な名前、名前そのものがなにか力を持っているような気がする」

「もちろん、持っていますよ。ただ、この名前は口にははいけません、これは絶対の約束、いかな」

「約束する」

男は手を放し、ほっとしたように女に笑い掛けた。

「さてと。何か希望はあるかな、普段の名前」

「お父さんの付けてくれる名前が私の希望の名前だよ」

「ええっと、それは責任重大だ。うーん」

男は女を見上げ、呟くように言った。

「一番の願いは君が幸せであること、今様のかっこいい名前もいいのかしれないけれど、名前に、幸せであれと、この願いを託したい」

「お父さん」

「幸福の幸の字をいただいて幸子、ゆきこ。でいいかな。さちこって呼ぶとなんだか演歌の人みたいだし」

女が男に抱き着く。男の両手が戸惑ったように空を掴んだ。

「ありがとう、お父さん」

女は男の耳に口を寄せ囁いた。

「名前を付けてもらったこと、これでね、今日は、私が生まれた日になったんだと思う」

「そういう考え方も楽しいね」

「うん」

女は体をずらすと、自然なそぶりで男に口づけをした。

そして、口づけをしたまま、男をしっかりと抱き締めた。男はいきなりすることに戸惑いを隠せずにはいたが、観念したように、目を閉じた。

「お父さんの唇、少し苦かった、珈琲、ブラック。私の唇はどんな味がした」

「甘い・・・」

「それはショートケーキだ、苺の」

女がくすぐったそうに笑った。

少々というか、いや、多々、回りの視線が突き刺さる。

女は男の横に椅子を据え、隣りに座った。

「私、お父さんと同じ時代に生きている、そして、同じ方向を見ている、それがとても嬉しい」

「そうだね、そう思うと普段の風景も違うように見えて来る」

「ね、お昼から用事あるの」

「特にはないよ」

「それじゃ、夕方まで、散歩しよう。同じものを見て回ろう」

「そういうのも面白いかもしれないね。財布渡すから、レジで会計してくれる、ちょっとね、レジへ行く勇気ない」

「なんだか、私、お父さんに頼まれたら元気百倍、なんでもできそうな気がする」

女は男の財布を受け取ってレジへ向かった。

ここがオープン・テラスで良かった、男は一人呟くと立ち上がった。世間体を気にするほどではないが、とってあまり人前で、いや、人前でなくても父娘では。

「お父さん、おいしそうなサンドイッチがあったからテイクアウト、お腹が減ったら一緒に公園で食べよう」

ふっと女は真顔になり男の目を見つめた。

まだ、私は自身が生きていていいのか、死に値する罪を担っていないと言えるのか、その解を見いだせていません。

多分、私は君の求める解に近いものを持っているかもしれません。

それを、教えていただけませんか

君が解を求める、その過程にこそ、意味があるのではと思います。ですから、私はそれを待ち続けたいと思います。

本当に・・・、ありがとうございます。

「私はお父さんにとって必要な存在になれるかな」

男はそっと囁いた。

「自分を認めてくれる人の存在はとても大切。それは生きる理由と同義だ。幸が父さんをそう認めてくれているのはとても嬉しいし、父さんが生きている理由でもある。ありがとう」

女は男の胸に顔を埋め、静かに、静かに泣きだした。

「もっと肩の力を抜いていいよ。そして泣きなさい」

男は不思議に感じた。会って一カ月、それなのに、まるでこの子が生まれた時からずっと一緒に

暮らして来たように思えてくる。

そして、そんな気持ちを正直に受け入れてしまおうと自然に思うことができる。

小指は約束の証。一生に一度だけの約束。

男はもう一度囁いた。

「ありがとう」

「お父さん、もう寝た」

そっと呟く。

枕を抱え、幸はそうると、男の部屋の襖を開けた。もう一緒の部屋に寝るのは卒業しなさいと男は幸に隣りの部屋をあてがったのだった。

男は心配していた。幸は既に呪術についても、武術についても男の能力を超えていた。

男はそれを素直に喜んだのだが、一つの問題が残ったのだ。幸は変わらず、極度に父親への依存を残していた。慕ってくれる娘はとても可愛い、だが、考えるのは、あの魔物は幸を拘束し、自らの道具として扱った。自分自身はどうなのだ、幸を独立し自我を確立させた一人の人間として育てるべきではないか。今のままでは、俺はあの魔物と対して変わらぬ扱いを幸に為しているのではないか。

幸は男の布団に忍び寄ると、男の顔をそっとのぞき込んだ。さらさらと流れる髪を男の顔にかからぬようたくしあげる。

「お父さんが幸のこと、しっかり一人でも生きて行くことができるようにと思ってくれているのはとっても嬉しい。でも、幸はお父さんのこと、大好きなもの、いつも、一緒にいたいんだもの」

幸は寝間着を脱ぐと、下着も外し、男の布団にもぐりこんだ。男の左に横になり、両腕で男の左腕でを抱き抱えた。

「幸はお父さんの左手の小指だよ、だから、ここが一番、幸だけの場所なんだ」

朝方、男はいつもより早くに目覚めた。窓のカーテンを閉めたつもりだったが開いている、部屋の明るさに目覚めたようだ。男は上半身を布団から起こすと、時計を見る。もう一寝入りするか、いや、それとも朝刊でも。

ああ、左腕だ。いつ頃からだろうか、どうも朝、起きると左腕が重い。まさか、これが四十とか五十とかの名が付く肩こり。年齢を単に数として数えなきゃならないのは仕方がない、しかし、体の状態としてそれが現れるのは厳しい。

「お父さん、お父さん、朝だよ」

幸はばんっと襖を開けると、男の太ももの上にどんっと乗った。

「おはよう、お父さん」

幸は男の両肩に手をやり、男に口づけをする。そして、幸の両腕に力が入った。

男は瞬間、数センチ、下に擦り抜け、位置を替えると、幸の両太ももから体を抜き出し、跳ね起きた。

「朝から、運動させないように」

「ちょっとした、お目覚めのキスだよ」

「舌を入れるな」

「これは流れっていうか、勢いみたいものだね」

えへへと幸は笑うと、ぱんぱんと布団を叩く。

「もう一度、ここ座って。お願い」

男は呆れたように、ひとつ、溜息をつく、幸の前に座った。

「はい、チラシです。今日のカニ食いまくり一泊バスツアー、ついでに、ちょっとした観光もありますが、目的はカニです。カニ様ですっ」

「ええっと、今日は土曜日お仕事です、平日です」

「仕事は昨日のうちにすべて済ましておきました、月曜日、書類をそのまま鞆に入れてクライアントに持って行くことができます」

「どうして・・・」

「忘れたの、今日はお父さんの誕生日だよ。お祝いのカニ旅行さ」

そう言えばと、男は幸に誕生日を問われたことを思い出した。男は自分の誕生日を知らない、だから、あの日を誕生日代わりに答えていた。それで、印象が薄かったのだろう。

「覚えていてくれたのか」

「忘れるわけないもの」

男はそっと右手で幸の頬を触れた。

「ありがとう、幸」

「・・・お父さん」

幸が微かに俯き、そして、瞳を閉ざしたまま、少し、顔を上げる。

「ありがとね」

男は立ち上がると押し入れを開けた。

「布団をしまわなきゃ」

「もおっ、お父さん。言葉だけじゃだめ」

「お父さんは恥ずかしがり屋さんです、ていう以前に父娘でござんす。でも」

「え・・・」

「幸の表情や言葉、とても豊かになったね。それがとても嬉しい」

「あ、ありがと・・・、私が片付けるよ。お父さん、顔洗って来て」

観光を終え、やっとホテルの部屋にたどり着いた。

「ええっ、一緒じゃないんですか」

「はぁ、男湯は十一階、女湯は地下一階となっております」

幸は仲居の言葉に、そのまま宿のテーブルにうつ伏せた。

「お嬢様、大丈夫ですよ」

「え」

「お時間で男湯と女湯を交替致します、ですから両方の御風呂をお楽しみいただけますよ」

「そうじゃなくて、あっ、それじゃ、この家族風呂はどうですか」

「こちらはご予約制でございます、フロントにてお承りいたしますが、ただ、ご家族の場合でもお子様は小学生までとさせていただきます」

「え、あっ、私、妻です。ねえ、あなた、そうでしょう。せっかくだし、一緒にお風呂入りましょうよ。背中、流してあげるわよ」

「娘が何か申してますけど、また、分からないことがありましたら、フロントに問い合わせしますので」

「そ、それでは」

そそくさと、ホテルの仲居が部屋を出て行った。

「ええっ、どうして。テレビの旅番組、混浴だったよ」

「そういうのは珍しい、普通は別々」

「そうだったんだ」

幸が溜息をつく。男はおかしくて笑った。

「幸、必死だった」

「だって」

男は湯飲みにお茶を入れると、幸に差し出した。

「だってさ」

男は少し笑うと、自分の湯飲みにお茶を注ぐ。

「幸はこんなおっさんを大切に思ってくれる、それは嬉しい」

「こんなじゃないもの、お父さん、世界で一番カッコいいよ」

「それは極々少数意見だな、多分、幸くらいだろう、そう思ってくれるのは。ありがとう」

「さて」

男は立ち上がるとホテルのタオルを取り出した。

「夕食まで御風呂入ってくるよ。幸もせっかくだ、御風呂に入ってきて来なさい」

「ううっ、うーん」

「さあ、立って準備して」

「お父さん」

「ん」

「浮気しちゃだめだよ、絶対」

「男湯で浮気は困難だ。それに、父さん、幸のこと、大好きだから、浮気はしないよ」

ガラス戸を開ける、幸はこんな広い大浴場に入るのは初めてだった。

掛け湯をして入る、そして、タオルは頭の上、タオルで髪をまとめてみる。

うん、これで御風呂の作法は良いはずだ。

見渡してみる、大浴場、ドアの向こうは岩風呂らしいけれど、そこまで行くのは、なんだか恥ずかしい。

ここにいるのは十人くらいかなと何気なしに数えてみる。

小さな女の子が、母親にだらう、頭を洗ってもらっている、でも、あまり女の子は得意ではないようだ、ちょっと痛そうな顔をしている。

女の子は幸が自分を見ているのに気づき、にっと笑う。幸も少し手を振り、笑い返した。

ゆっくりと母親が女の子の頭からお湯を掛ける。

幸はなんて幸せな情景なのだろうと思った。

「子供か……。いいな、こういうの」

とにかく、と幸は考えた。

父娘というのは便宜上のものというか、見た目がそうだからってだけだ。幼な妻なんて言葉もある。お父さんは、とっても奥手なわけで、生真面目なわけで、私がしっかり誘導してあげれば、きっとお父さんだって。

「幸、本当にいいのかい」

「うん、だって私……。お父さんのこと、愛しているもの」

「うわあ、愛している。きゃー」

幸は妄想が声に出ているのに気づき、あたふた、お湯の中へ潜り込んでしまった。

恥ずかしい、誰かに聞かれたらどうか、少し顔を出し辺りを眺めたがこちらを見ている人はいなかった。

そうだ、とにかく、夕食はビールを注いで、ほろ酔い気分になせよう。

もう、しょうがないなあ、飲み過ぎだよお、私が肩貸してあげるよ

えっと、そうすると私がお父さんの左側にこう立つわけだから、そうだ、ちょっとよろけて、すぐにたち直すんだけど、その時、お父さんの左手が私の胸に触れて、私が小さく、「あっ」って叫んで、そうしたら、お父さんがごめんて言うから、ううん、お父さんなら、いいの、だって、私……。って言いながら、少し顔を赤らめて見上げる。

よし、今日はしっかり体を洗って、私、頑張る。

湯船から幸が立ち上がった瞬間、幸は手を伸ばし、何か黒いものを掴んでいた。

すうっと鋭い目付きでそれを見る。それは小さな鼠だった。

なんでこんなところにいるんだ。

顔を寄せ、じっくりと鼠を見つめる。

この鼠、人の眼をしている、なんなんだ、これは。そうか、術者だ、術者が心をこいつに入れて偵察しているんだ。

幸はふっと鼠に息を吹きかけた。

「あんた、この鼠が死ぬまで、その中で鼠として暮らしたな」

幸は鋭いまなざしのまま笑うと、鼠を軽く放り投げた、着地する前に鼠は消えてしまった。

でも、と幸は考えた。

どうしてこんなのがいるんだ、術者なんて数も少ないし、それが偵察をして何かをしようとしている。

まさか、お父さんを。そうだ、お父さん言っていた、呪文を唱えないこうした呪法は外法とさげすまされ忌み嫌われている、だから、普段は術者としての気配は消しておきなさいって。

まさか、お父さんが危ない。ううん、大丈夫だ、お父さん、強いもの。どんな奴が束になって襲ってきても、お父さんならふふんって鼻歌唄いながら、けちらしてしまうもの。

でも・・・、お父さん、左腕がおかしいって言ってた、あれ、私のせいだ。毎晩、私が抱いていたせいだ。もしも、お父さんが怪我をしたら、私のせいだ。ごめんなさい、ごめんなさい、お父さん。

お父さん、今、助けに行く。

幸の右手に刀が現れた、長物、ゆうに2メートルはある。

それを軽々と片手に持つ。

幸は体の後ろに刀を隠すよう構えると、入り口の扉を睨みつけた。弾かれたように扉が開く。

大丈夫だよ、お父さん。いま、行く。

「お風呂直すかなあ」

男はつぶやき、悠々と足を伸ばす。なんといっても、足を伸ばしきれるのがいい。

思い切って、お風呂を大きく直そうか、しかし、財布の紐をしっかりと幸に握られているいま、贅沢だと叱られるかもしれないな、まっ、こういうのも、たまにだからいいのかもしれない。

・・・お父さん・・・

幸の声をしたような気がした、その瞬間、ぱんっと扉が開き、怒涛の風が流れ込んだ、湯が洪水のように弾け飛ぶ。

「お父さん、大丈夫」

「ああ、1秒前まではね」

男は回りを見渡す。桶が散乱しているのはもちろんのこと、辺りは水浸し、5人、倒れている、一人足りないな、逃げたか。

「みんな、意識を失っているだけだ、お父さんは大丈夫だよ」

幸はこの惨状に初めて気づき狼狽えた。

「お父さん、これ、どうしよう」

「まずは刀を消してくれる」

「は、はい」

かき消すように刀が消えた。

「何があったか、訊くのは後回しだな。脱衣所、入り口一番近くのかご、十一番が父さんの使っていたかごだから、浴衣と帯をして、女湯に戻りなさいな。その間、誰にも会わないよう、誘導してあげるよ」

「ごめんなさい、お父さん。後で浴衣と帯を返すからね」

「それ、早く行け」

「はいっ」

幸が男湯を飛び出した。

男は目を瞑り、小さく小さく呟く。

「立派なモノをお持ちですな、羨ましい」

男が薄目を開ける、太った老人が男の前にいた。一人、足りないと言った男が判断した老人だった、まるで、大きな酒樽のような姿だ。

男は、かまわず、そのままの表情で呟き続ける、やがて、幸が女湯に辿り着いたのだろう。男は老人の目を睨め付けた。

「申しわけありませんが、下（しも）のお話は得意ではありませんので」

「いやいや、先ほどの人形（ひとがた）、護法童子のことです。あれほどのモノを作られるとは名のある術師とお見受けいたしました」

「あれは私の娘です。娘をモノに喩えられるのは不快です。次は命がありませんよ、後ろの方にも、そのようによくお伝えくださいな」

「何もかもお見通しのようで、あな恐ろしい」

老人は奇妙な笑い方をするとそのまま立ち去った。

まずは、気絶した人達を起こすか・・・。

「ああ、もう最悪だよお」

テーブル式の宴会場、幸にとっては今回の最大の目的、カニ食べ放題の会場だった。

テーブル、幸は男の前の椅子に座り、皿一杯のカニを前にしても、ぶつぶつと繰り言を呟いていた。

「ごめんね、お父さん。変なツアーになってしまって」

「ん・・・、父さんは嬉しいけどね、だって、幸が計画してくれた旅行だからさ。どうしたら、父さんが喜ぶか、考えてくれたんだろう」

「うん、そうだけど」

「なら、こんな嬉しいことはないよ。良い娘を持ちました、たまに暴走するけどね」

「だって、あれは・・・」

「鼠を使う奴らは、そうだな、たまにはいる。確かに何かあるかもしれない。とにかく、判断材料が少ない今、考えても仕方がない。なら、喰いましょう、カニ様を」

「私、食欲ないよ」

「ん、幸はカニは初めてだったかな」

男は器用に蟹の身を取ると幸のお皿に載せた。

「まずは、ささっ、喰うてみなさい」

「いいけど・・・」

渋々といったふうに幸は自分の口に蟹の身を運ぶ、そっと食べる。

「うわっ、美味しい。ええっ、どうして」

「それはカニさまだからです」

男は笑って、次々と蟹の身を取り出すと幸のお皿に載せていった。

「お父さんも、お父さんも食べて」

「こういうところで食べるカニは、スーパーとは違うな」

「お父さん、私、機嫌直った」

「それは良かった。カニ鍋に焼きカニ、豪勢なものだな」

「幸、その小さな七輪、網にカニの足を載せなさいな」

「うん、わっ、香ばしい匂いだ」

「御同席お願いできませんかな」

男の前、幸の後に風呂場での老人とその妻だろうか、品の良い女性が立っていた。

「他に席がないのでしたら、どうぞと申し上げますが、まだ、いくつも空いたテーブルがあります、そちらにお願いできませんか。親子団欒の最中ですので」

「もう、あなたったら。失礼ですわよ」

後の婦人に促され、二人は一つ置いたテーブルについた。

「お父さん」

幸は声をひそめ、男に話しかけた。

「背中が冷たかった」

「そうだろうな、あれ、空洞だからな」

「どういうこと」

「うーん、幸は間違いなく、お父さんよりも呪術も武術も上回ったけど、経験はもう少しだな。世の中、遍くいろんな存在がある。でも、あとでね、カニを食べなきゃ」

ふと、幸はビールのことを思いだした。

「ね、ね、お父さん、たまにはビールとか、た、頼んだらどうかな。折角の旅行なんだし」

「どうしたの、いきなり。父さん、あまり、アルコールとか得意じゃないし」

「ただ、大丈夫だよ。少しくらい」

「なら、一本だけもらおうかな」

「それじゃ、私、もらってくる」

幸は立ち上がると、ウェイターに声を掛けに行った。

男は、一つ吐息をもらすと、辺りを見渡した。いくつか、そう、いくつかの人外ものがある、密度が濃すぎる。これは縁というものなのか、しかし、幸には、こんなのじゃなくて、本当に普通の、何処にでもあるような平凡な生活を送らせてやりたい。あの子はもっと幸せになるべきだ

。呪術を教えたことは間違いだったか、いや、特別な力がなければ、自身を守ることは出来ない、なんてことだろうな、矛盾した話だ。一度、足を踏み込んでしまうと、もう、抜け出せないのだろうか。

「お、お父さん、どうぞ」

幸は男の横に立ち、ビール瓶を差し出した。

「それじゃ、ちょっとだけ。半分、注いでくれればいいよ」

「は、はい」

「どうしたの、妙に緊張している」

「そ、そうかなあ」

男は幸にビールを注いでもらおうと、美味しそうに一口飲んだ。

「幸も、さあ、食べなさい、残したらもったいない」

「そうだよ、もととらなきゃ」

「太り過ぎない程度にどうぞ」

「私は太らないよ、だって、お父さん、細身の女性が好きなんだもの」

「別にそういうわけでもないのだけど」

「ね、横に座ってもいいかな」

「どうぞ」

幸は男の横に座り、今度はカニ雑炊を食べ始めたが、ふと向こうのテーブルに気づいた。

「お父さん、あの女の子だ」

それは、幸が風呂場で手を振った女の子だった。

「バスは3台出ていたから他のバスに乗っていたんだらうな」

「お父さん、なんだか、おかしい。女の子、じっと座っているだけだ」

男は女の子の両親だろう、お互い視線を虚ろにしたままカニを食べている夫婦の姿に疑念を抱いた、どこかに操る奴がいる。

「おせっかいしますか」

「うん、気になる、何か悪いことが起こりそうな気がする」

男は自分の髪の毛を一本抜くと、女の子に向けてふっと吹き飛ばした。瞬間、幸の姿が薄くなったかと思うと、女の子を自分の膝に乗せていた。そして、女の子は変わらず向こうのテーブルにもいた。

「髪の毛、一本だけど如才なく対応するでしょう」

男は呟くと、女の子を見つめた。

「ちょっとだけ時間いいかな、カニ、お姉ちゃんが一緒に食べようって」

女の子は驚いたふうに目を見張っていた、一瞬にして、知らない女性の膝に自分が座っているのだ。しかし、幸の自分を見つめるまなざしに、不思議なほどの安堵感を覚えた。

「だめなの、あたし、水しか飲んじゃいけないの」

「それは、おっちゃんもお姉ちゃんもとっても哀しい」

「お母さんにそう言われたのかな」

幸は、そっと女の子に頬を寄せ語りかけた。

「今日は神様になる日だから」

「神様って・・・」

男は笑顔でそっと囁いた。

「そっか、でもね、お腹減ってたら、動けないし、哀しいし、そんな君を見たら、お母さんも哀しいかもしれない」

「お母さんが」

「そうだよ。ね、君の名前は」

幸が言葉を継ぐ。

「あかね」

「あかねちゃん、良い名前だね。お姉ちゃんは幸っていうの」

「幸お姉ちゃん」

「うん、そうだよ。今晚、あかねちゃんはとっても困ったり、哀しかったり、怖かったりするかもしれない。その時は幸お姉ちゃんの名前呼んでくれる」

「うん」

「お姉ちゃんは、ほんとはとっても凄い魔法使いなんだ。だから、呼んでくれたらすぐに助けに行くからね」

初めてその女の子は笑顔を浮かべた。いったい、どれほどの苦悩をその身に隠していたのだろう。

「ね、カニを食べよう」

「ううん、我慢する」

「そっか。それじゃ、お守りをあげよう」

幸は髪を一本抜くと、女の子の手首に括った。すぐに髪は手首の中に消えてしまった。

「幸お姉ちゃん」

「ん・・・」

「また、お母さんやお父さん、笑ってくれるかな」

「大丈夫だよ」

女の子が笑顔を浮かべた。

幸の姿が一瞬消え、再び現した時、膝に女の子の姿は見え、一本の髪の毛だけを持っていた。

「幸、人はどうして学習しないんだろうな、また、愚かなことを繰り返そうとしている」

「お父さん、神様って」

「言葉どおりのことだよ、外神という異なる次元に住む神、邪悪な力の集合体だ」

「世代が代わり、不安定な時代が来ると、決まってあんなのにすがるという奴らが現れる」

食事の後、二人はお土産コーナーを覗く、ある意味、どこにでもあるまんじゅうだとか、ちょっとした特産品が並ぶ。

「お父さん、羊羹の詰め合わせがあるよ、おいしそう、買っていいかな」

「そうだね」

男は少し沈んだように答えた。幸は、心配げに男の顔を見つめていたが、男の腕にしがみつくようにして、見上げた。

「部屋に戻ろう、ね、お父さん」

部屋に戻ると男は椅子に腰掛け、窓から夜の海を眺める、十階からの眺望だ、眼下には温泉街、車のヘッドライトだろうか、賑やかに明滅している。

そんな男を気にして、幸はぼおっとテレビのニュースをつけたまま、俯いている。

男はひとつ吐息を漏らすと、ゆっくりと立ち上がった。

「テレビ、消してくれる」

「う、うん」

幸がテレビを消すと、男は入り口の横にある室内灯のスイッチを消した。

外からの明かりが辛うじて二人の姿を映す。

男が部屋の中央に座る、幸は自然と男の前に座った。

「あまり顔が見えないね」

「うん、うっすらとお父さんの顔が見えるだけ」

「父さんも幸の顔、はっきりと見えないな。でも、この方が話しやすい」

闇の中、男は見えない笑顔を浮かべた。

「幸、父さんは新米だ。何十年もお父さんをやっているわけじゃない。でも、幸のこと、一番大事に思っている、それだけは自信ある」

「ありがとう、お父さん、私もお父さんのこと、一番大事だよ」

「ありがとう。ただ、父さんはわからないんだ、幸には幸せになってほしい、でも、父さんは幸せというものが分からない。平凡に生きて欲しい、普通の、どこにでもいる女の子のように生きて欲しいと思うこともある。いや、それが一番いいんだと信じたい。でも、父さんは術師であり、その血と肉と骨を幸に与えて、幸まで、父さんと同じ世界に引き入れてしまった」

「違うよ、お父さん。私は普通の女の子じゃなかった、お父さんに会うまでからさ。だから、心を入れ替えました、これから普通に生きて行きますなんてなるわけないよ」

幸はそっと笑顔を浮かべ、男に囁いた。

「ね、お父さん、本当は私、とても悪い人間なんだ、心も体も汚れていて、人の命くらい平気で奪うことができるんだ。でも、お父さんといると、お父さんのこと考えていると、良い娘になりたい、優しくて思いやりのある、そんな、お父さんに好かれる娘になりたい、そう思えるんだ」

「ね、お父さん、お願いだよ。幸を良い娘のままいさせてよ、お父さん」

男は黙って幸を抱き締めた。

「愛している、お父さん」

「お父さんも幸を愛しているよ」

「お父さん、私の浴衣の帯を解いて。もっと、お父さんの近くに行きたい」

男は黙って幸の帯を解く、そして、幸の両肩に手を触れ、ゆっくりと浴衣を脱がした。

「お父さん、恥ずかしいよ」

そっと俯く。

「恥ずかしくなんかないよ、幸はとっても綺麗だ」

「・・・お父さん」

男はそっと幸の胸の膨らみに触れた。

「とってもやわらかい」

「なんだか恥ずかしいけど、嬉しい」

一瞬、幸の体が硬直した。

「うわあああつ、お父さん、体中が痛いよ、体がちぎれてしまいそうだよ」  
闇の中、男は素早く幸を仰向けに寝かせ付け、幸の体に両手をかざした。

「幸、目を瞑ってなさい」

幸がぎゅっと唇を噛み、目を瞑る。

男の両手が薄青く光り出し、幸の体を照らし出した。

体中が乾いた土塊のようにひび割れだし、そのひび割れから血が滲みだしていた。少し押せばもろく崩れてしまいそうだ。

男はぐっとにらみつけると無言のまま、両掌を天へとかざし、手を下ろすと右手を幸の臍に置き、左手をその上に重ね、強く息を吐いた。

幸の体に清水が染み渡るように拡がり、ひび割れは消え、柔らかな体に戻る。

「目を開けてごらん、まだ、何処か痛いか」

「痛くない。お父さん、ありがとう・・・」

「どういたしまして」

男は笑顔を浮かべると、幸の背中を支え、体を起こした。

「浴衣、着なさいな」

・・・お姉ちゃん、幸お姉ちゃん・・・

「あかねちゃんだ・・・」

「幸、浴衣やめて服を着なさい」

男が鋭く言った。

「はい」

室内灯が点く、一瞬で二人は浴衣を脱ぎ、着替える、そして、男は腰の後ろに小刀を差した。

「幸は覚えていないだろう、幸もあかねちゃんと同じだったんだ、祖父は幸を助け切れなかった」

「ええっ、そ、そんなの聞いていないよ」

「父さん、いま、初めて言った」

「行くぞ、幸」

「は、はい、行きます」

部屋のドアを開け、二人は駆け出した。

「幸、位置を特定できるか」

二人、加速し、まるで、階段を落ちていくように駆け抜ける。

「この距離だと地下のお風呂場です」

「水を媒体にしたか」

階下に降りるほど、ホテルはまるで廃墟の様子を呈しだしていた。

「時間をずらして壁を作ろうとしている、新手だな」

「お父さん、地下への階段がない」

空気を劈き、二人も停止する。目の前、階段があるはずの場所は鉛の色をした壁になっていた。

「幸、刀を出しなさい」

「はい」

幸の右手に2メートルはあろう長刀が現れた。

「まやかしの呪符がある、中央を切り裂け」

「はいっ」

袈裟懸けにいっせん、溶けるように壁が消え、地下への階段が現れた。

・・・幸おねえちゃん・・・

「聞こえる、あかねちゃんの声だ」

男は地下へと一気に飛び込んだ。

地下の大浴場、だった、はずだ。湖、鉛かと思まごうような靑い湖が広がる。バス3台分の人間達、浅瀬だろう、膝辺りまでびちゃびちゃと音を立て無表情に踊っている。

「あれか」

緑色の小さな光球が空中に浮かび、二人の人間が光に捧げるようあかねを高く差し出していた。よく見れば、光球の表面が時折脈動している、外神の本体が出現しようとしている。

「じいさん、あの時と同じだ。今度は失敗しないよ、憑依させてたまるか」

「呪は唱えない、この身この心、既に呪と化したモノ、強く意念を用いれば、それ、すなわち、呪なり」

「いやだー」

あかねの声が空気を切り裂いた、瞬間、男の姿が消え、あかねを抱いたまま、足下の人間を蹴り飛ばした。水面を駆け、陸地へ戻る。

「ああっ、おねえちゃんが」

男が振り返る、幸が光球を見つめ茫然と立ちつくしていた。

「うわあああっ」

幸の叫び声が空気を震わせる。

「みんな死んでしまえ、どうして、あたしだけが、あたしだけが」

2メートルもの長刀が空気を切り裂き、刃の殻と化す、

「死んでしまえ、なにもかも、消えてなくなれ」

「おっと、これは参ったな。思いだしてしまったか・・・」

男は茫然としていたが、あかねを地面に降ろし、幸と緑の光球を交互に見る。

「言霊にすらなり得ない喚き声には力はない、しかし、外神、押し返すの手伝って貰らうつもりだったけれど、これでは無理だ」

幸に近づこうとするあかねを男は押しとどめた。

「おねえちゃんに近づいたらだめ。遠くから見守ってやって」

男はそっと語りかけると、光球を見つめた。憑依する体を無くして、制限が効かなくなったのだろう、じわじわと大きくなっていく。

「個人零細自営業者、人を雇いたくても給料払えませんってやつでね、一人でなんとかしなきゃならない」

男は腰から小刀を抜くと、光球に対して半身に構え、刃先を光球に構えた。

「帰れ、闇の空間へ、光なき遠き宇宙へ」

男が静かに息を吐き出す、男の足が地面に食い込みだした。男と光球の間、空気が重く密度を増す、まるで鋼のように空気は固まり、じりじりと光球が後退しだした。

男が呟く。

「親父、俺がまだ小さな頃、さらって来たんだってな、必ずしも実子が才能を受け継ぐとは限らない、才能があるとかで、俺にとっては、そんな勝手な理由で、さらってきたんだってな。俺はその運命を受け入れた、小さな子供がどうやって、逃げ出すことが出来る。その反感か、俺はこの力を俺の代で終わらせるつもりだった。親父、爺さん、良かったな。間に合ったよ。しかし、次にこいつが来たときは知らないぜ。今日は俺がさらわれた記念日だ」

「闇に帰れ」

光球の後がじわりじわりと消えだした。半球となる、あがなおうとするのか、表面の脈動は大きくなり、それがまるで触手のように動き出す。

「帰れ」

光球がふっと消えた。

男は刀を構えたまま、消えたその先を睨み続けた。

踊っていた人間がばたばたと倒れていく、操り糸が切れてしまったように。

「まだ、一つ仕事が残っている、こっちの方がやっかいで、俺にとっては大切な仕事だ」

そっと振り返る。

状況は変わらず、いや、より酷くなっている。刀が見えない、目で追える動きを越えたということか。

「うわああ、何もかも死んでしまえ」

男はほっと溜息を漏らし、小刀を腰に戻した。

「あかねちゃん、お姉ちゃんはね、友達がいなくてね、寂しがり屋なんだ。お姉ちゃんが正気に戻ったらさ、いい子にするよう言い聞かせるから、友達になってやってくれないかな」

「お姉ちゃんが優しいこと、私もう知っている、友達だよ」

「ありがと」

男はあかねの頭を軽くなでると、手を離し、幸に近づいた。

幸の動きにはまだ癖が多い。見えない以上、運を天に任し、感でと経験で動くしかないか。

男は呟くと、何事もないよう、普通に歩き出した。男の足跡が消えていく。体の重さが消える。風を読む。

男はふわっと幸の後に現れると反転し、右腕で背中を押さえ、体を落とした。幸の体が地面に落

ちる。長刀が柄の辺りまで地面を貫いていた。

「みんな死ね、消えてなくなれ」

涙を流しながら、幸は呻いた。

「あの頃の幸のこと、知っているよ。沢山の人に裏切られたこと、傷つけられたこと。人身御供にされたこともね」

「なら、どうして、どうして」

「許すのは無理だろう、ただ、幸、お父さんは本当に幸のこと、愛している。大切に思っている」

男は手を離すと、幸を抱き起こし、しっかりと抱きしめた。

「まずはお父さんを斬ってくれないか。お父さん、幸の怖い顔、見たくないんだ、怒った顔、見たくないんだ。だから、最初に殺してくれないか」

「いやだよお、お父さん、お父さん。うわあぁっ、私、良い娘になるよ」

幸は男にしがみつくと、静かに静かに泣きだした。

踊っていた人間達を元の世界に戻し、正気を取り戻させることくらい、幸には容易いことだった。彼らを脱衣所に仰向けに寝かせ付ける。

「あかねちゃん、恥ずかしいところ、見せちゃったね」

「でも、お姉ちゃん、来てくれた、嬉しかった」

「役に立たなかったけどね」

幸は恥ずかしそうに笑うと、男の後に隠れた。

「すぐに、みんな意識を取り戻すよ。あかねちゃんのお父さんもお母さんもね」

男は笑顔を浮かべるとあかねに話しかけた。

「みんな、2、3日、記憶を失っている。どうして、こんなところにいるんだと驚くと思う。あかねちゃんも同じように、わからないって言うこと。いいかな」

あかねは肯くと、両親の横に座った。

「幸お姉ちゃん、また、会えるかな」

「きっとね」

幸はあかねに笑いかけ、男と二人、脱衣所を出た。

「幸」

「え・・・」

「魔法使いは大変だ、守らなきゃならない人、一人出来てしまったな」

「二人守らなきゃ、お父さんも守らなきゃだし」

「そうだな、お父さん、へとへとだ。でもね、もう一つ、仕事が残っていた。ホテルの外」

「お父さん、私が片づけておくよ」

「ん・・・、お父さんが行く、幸、手加減できないからね」

「返す言葉ない」

男は笑うと、ホテルの一階に戻る。深夜のごく普通のホテルに戻っていた。位相をずらした奴らが外にいる。

男と幸は外に出た。

一步出ると、外は薄闇の荒野と変わり果てていた。振り返るとホテルはない。

「残念でしたね、でも、外神などと付き合わない方が良く、喰われてしまいますよ」  
あの酒樽のような男が薄闇の中から溶け出すように現れた。その婦人が、一步、退いて控えている。

「他にもたくさんの人達がいらっしゃるようですね」  
男の声に呼応するかのように、顔を隠したたくさんの男達が二人を囲んだ。

酒樽が言う。

「折角の外神、この腹に入れて世界を変える力を得るつもりだったのですが、とんだことでしたな。残念です」

「いや、その程度の防壁では無理です」  
男がぎっとにらみつける。酒樽が粉々に弾け飛んだ。

「あらあら、また、作りなおさなきゃ」  
酒樽の後にいた女が平気な顔をして呟いた。

「こういう人形を創り出すとは、かなり大きな組織のようで」  
「いささか」

女は笑顔を浮かべたまま、一步、踏み出した。

「労せず、外神を横から奪い去ろうという計画だったのでしょよね、たくさんの人達が迷惑を被った」

「あとでお詫び申し上げておきますわ」

男はふんと笑みを浮かべる。

「提案です。この件から手を引き、ここはひとつ、素直にお帰り願えませんか」

「で、こちらの益は」

「あなた方の命ということで。無事にお帰りいただけますよ、いまなら」

「夫が潰されたいま、しょうがございませんね。お暇いたします、では、これにて」

女の姿がかき消えた、同じく覆面の男達が次々と消えていく。

「あいつ、腹で何考えているかわからない奴だ」

「だろうな、正体すら見せようとしな。ただ、実はお父さん、立っているのがいっぱいね。  
ホテル、帰って、一寝入りするよ」

幸は男をしっかりと支えた。

「ごめんなさい、お父さん」

「どういたしまして」

老女の仮面を剥ぎ取った女が、部下を怒鳴りつけていた。

「おい、あの規格外の奴らはいったい何者なんだ」

「不明です、ただ・・・」

「ただ、なんだ」

「本部から・・・」

「はっきり言え」

「あの二人には一切触れるべからず。直ちに帰投せよとの厳命です」

「何言っている、本部の腑抜け連中が。外神（そとかみ）を手中に出来なかったのは残念だが、その外神を追い返してしまうほどの術者がいるんだぞ。捕獲しないでどうする」

女は周囲にいる部下の無事を確認すると、唇をゆがめ、笑った。

「楽しいなあ、おい、わくわくしてこないか」

「そんなに楽しいかなあ」

俯いた幸が肩が触れるほど女の横に体を寄せる。そして、落とした腕には長刀が握られており、その刃が女の首元に触れていた。

「ね、そこのおじさん、動くとおんたの上司の首、落ちてしまうよ。他の人達にもさ、動かないよう指示してくれないかな」

「わ、わかった。待機、待機せよ」

ざわついた空気が沈黙に変わる。

「ありがとね、おじさま」

つううっと刃先から赤い血が滴り落ちた。

「お姉さん。首、動かしちゃいけないぜ。ほら、浅く切れちゃったじゃないか」

「いったい、お前達は何者なんだ」

悲鳴にも似た叫び声を女が上げた。

「それは秘密さ。ただね、さっき約束したろう、帰るってさ。あれ、嘘だったのかい。ね、嘘じゃないだろう、本当だろう。本当だと言ってくれよ」

「ああ、本当だ。一切関わらない、約束する」

女は震える声で答えた

「あたしとお父さんはさ、普通に、平凡にさ、暮らしたいんだよ。わかるかい、つまないさ、退屈な平和ってのを続けていきたいのさ、そういうの、わからないかなあ。ね、そこのおじさんはどう思う」

「こういう、斬ったはったは好きかい。こんな寒い夜中に突っ立っているよりさ、夜はさ、暖かい布団の中、寝てはいたくないかい」

じろっと睨む幸の眼差しに、引きつった笑いを浮かべながらこくこくと肯いた。

「よくわかってるじゃないか。ね、おじさん、あんたの上司は、そこんとこさ、ちゃんとわかっていると思うかい」

「わ、わかっている、わかっている」

「本当かなあ、わかってんのかなあ。あたしはか弱い女の子だから人を斬ったりなんて出来ない

けどさ、それを承知でいい加減なこと言っているだけじゃないかなあ」

「ね、お姉さん、ちょっと俯いてさ、あたしの顔を見てみなよ、な、そんな乱暴するような女の子じゃないだろう」

おそるおそる俯き、女と幸と目が合う、鋭い目付きで、口元だけが笑う幸がいた。

「うわああっ」

女が悲鳴を上げる、逃げだそうとするが、体が固まってしまったように動けずにいる。

「なんだよ、人の顔見て悲鳴上げるなよ。自分で言うのもなんだけどさ、あたし、かなり美人のはずだぜ」

「ねえ、お姉さん、あたし、美人だろう、可愛いだろう、な、そう言ってくれよ」

「助けてくれ、もう、あんた達には一切関わらない」

「なんだよ、可愛いって言ってくれないのかい、ショックだなあ」

幸はにいいっと嗤う、そして、すうっと長刀が消えた。

刀が消えた瞬間、男達が幸を襲おうとした。

「動くなよ、な」

眩く幸の声に、男達は凍り付いたようにその場に固まってしまった。

幸は、動けずにいる女の目をじっと見つめた。

「瞳って名前か。綺麗な名前だね、夫がいて、幼稚園の男の子がいる、おい、あんた、小さな子供がいるくせに、こんなやくざな仕事してるのかよ」

「どうして、それを」

「あんたの目から記憶を読んだ、それだけ」

慌てて、女が目を瞑る。

「夫の名前は直行さん、息子は、隆君か、良い名前じゃないか。こういうのを二重生活っていうんだっけ。そうだ、思いついた、あたし、今度、瞳さんのお宅にお邪魔するよ、ご主人と隆君のいるときにさ、次の日曜日なんかどうだい、ホームパーティしよう、楽しいぜ」

「お願い、許して」

「どういう意味だよ。あたし、素敵なお姉さんやってやるよ。隆君の好きなさ、プリンをお土産に持って行ってあげるよ。そして、可愛いって隆君の頭なでてやるよ。でもさ、私、子供の頭ってなでたことがないから大丈夫かなあ、緊張してさ、ちょっと力入れすぎて、ぼきって折れたらどうしよう。子供って、ぼきって首が折れたら死ぬのかい」

「勘弁してください、お願いします」

「ふうん、良い提案だと思ったんだけどなあ、お互い、守りたい家庭があるってことだ。しょうがない、それじゃあ、帰るよ。あんた、約束忘れるなよ」

ついつと幸の姿が消えた。

「一切触れるべからず」

女が喘ぎながら呟いた。

「なんて奴だ」

女が呟いた瞬間、怒号が轟いた。

女の目の前、幸の持っていた長刀が投げつけたように地面に突き刺さっていた。

突き立った刀の上に幸がふわりと舞い降りる。

「夜中だぜ、早く帰りなよ。徹夜は、お肌の大敵だ」

声を上げて幸は嗤うと、刀と共にその姿を消した。

「帰る、今すぐ帰ります」

女は怯えてそう呟いた。

「お父さん」

「幸、何処に行っていたの」

座椅子に座ったまま、男は振り向いて幸に声を掛けた。幸は後から男に抱きつくと、くすぐったそうに笑った。

「秘密。乙女にはさ、殿方には秘密にしなきゃならないこと、百はあるのさ」

「ああ、トイレか」

「違うよ、もお」

男は微かに笑うと、少し掠れた声で話しかけた。

「幸、隣に座ってくれないか」

「え、うん」

幸は男の左隣りに座ると、男の顔を覗き込んだ。

男は目を瞑っていた。

「父さんの手、握ってくれないか」

幸は心配そうに男の手を両手で包み込む。

「お父さん、疲れたの。ゆっくりするといいよ」

「ちょっとね、ばてたかな。でも、幸に手を握ってもらっていると、不思議だ。こんな小さくてきゃしゃな手なのに、柔らかくて暖かくて安心する」

「幸は可愛いなあ。父さん、一人で生きて来たけど、今はもう、幸がいてくれないと、だめだな」

「お父さん、どうしたの、そんな急に」

ふと、幸は男の手が少しづつ冷えて来ていることに気づいた。

「そんな……。そんなのってないよ。お父さん」

「お父さん、嫌だよ、そんなの、嫌だ」

幸が叫んだ。

「暴走娘がいるのに、まだ、死ねないよ」

男は少し目を開け笑った。

「消耗が激しいからさ、呼吸法で仮死状態に入る。幸が手を握っていてくれるなら、安心だ。朝には起きるさ」

幸が震える声で答える、

「絶対の、絶対だよ」

「ああ、絶対だ」

男の体温が少しずつ下がり、心臓の鼓動が鈍くなる。

お父さん、明日は、ツアーやめてさ、二人っきりで歩こう。あちこち、食べ歩きしよう。腕組んでさ、歩きながら食べよう。きっと、楽しいぜ、ねえ、お父さん、お父さんったら・・・

幸はぎゅっと男の手を握り締めた。

愛しているよ、お父さん・・・。

## 異形四話

---

闇の中、男は頭を抱え悩んでいた。

一体なんてことを、俺はしたのか。

それは旅行の夜だった、自分の前に幸を座らせ、その幸の浴衣を脱がしてしまった、滑らかな肌、その時の甘い感触が指に残る、もちろん、父親としてそれは許される行為ではない、ましてや、幸がいてくれないと生きていけないなどと、幸の心を縛ってしまうようなことを言ってしまった。そうだ、もしも、幸に異変が起こらなければ、間違いなく、幸を最後まで……。

心が不安定だった、それは確かだ、しかし、それは醜い言い訳だ。

幸はどれほど傷ついたらろう、幻滅したらろう。

「おーい、お父さん、一緒に晩御飯作ろお」

襖が開き、幸が男の部屋を覗き込んだ。

「お父さん、部屋が暗いよ、どうしたの」

男は慌てて表情を隠し、普段通りに返事をする。

「ん、いや、そうだね、少し考えごと。晩御飯、作ろうか」

「うん」

幸はにっと笑うと、男の手を両手で引っ張った。

二人して流しの前に立つ。

「お父さんは白色のエプロンです、真ん中にキリンさんがいます。幸のは赤と白のストライプ。赤一色は随分と色が濃かったので、ストライプ、真ん中にはウサギさんです」

「買ってきたの」

「えへへ、晩御飯の用意と一緒に買ってきた」

幸はにっと笑い、ジャガイモやタマネギを取り出した。

「今晚は美味しい美味しいミネストローネです。お父さんはジャガイモの皮剥きをしてください。」

「美味しいを強調しましたね、それは先日のトマト風味ジャガイモの煮っころがしからの反省でしょうか」

「その通りです」

幸は笑うと袋から人参やベーコンも取り出した。

「幸はひとつ賢くなったよ」

「と、いうと」

「ひたすらレシピに忠実であること。素人が工夫をしてはいけない。これとっても大事」

男は器用にジャガイモを包丁で剥きながら笑った。

「工夫はもっとうまくなってからか……。でも、ジャガイモの煮っ転がし、幸が作ってくれたから美味しかったな」

「そう言ってくれるお父さん、大好き。なんかね、そう言われるとさ、今度はもっと頑張らなきゃ、って思うんだ。そう思えることって嬉しいよ、とっても」  
幸がタマネギを切りながら答える、タマネギを八等分したものをボールに入れ、ああそうだと、トマトとハーブも取り出した。

「お父さん」

「ん」

「ハーブって不思議だね、こんなのただの葉っぱだよ、ローリエとか特にそうだよ。でも、入れるとお肉の臭みがなくなったり、これって凄いよ」

「そうだね。ん・・・、暖かくなったら、庭にハーブを植えてみるのもいいかな」

「それいいなあ、藤のバスケット片手にね、ハーブを摘んでお茶にしたり。そうだ、緩やかな白のワンピースに幅広の白い帽子もいるな」

「なんか、映画で見たような情景だけど、着替えるほどご大層な庭ではございません」

「楽しむための雰囲気作りさ、二昔前の御令嬢。お父さんが執事でね、お嬢様、お茶のご用意ができましたって言う。そうすると、幸はふっと指先を止めて振り返る、ありがとう、セバスチャン」

「セバスチャンですか」

「そうだよ、そして、お嬢様、お手をと言ってお父さんが手を差し出して、幸は言うの、今日は素敵なティーパーティなりそうかわって」

「お嬢様、お手を」

男の言葉に一瞬、幸は戸惑ったが、

「えっ、あ・・・人参かあ」

幸に人参を男から受け取り、四つ切りにしたジャガイモをボールに入れた。

「お父さん」

「ん」

「畑も作ろう、野菜、高くなってる」

「色々と野菜を植えてみるかな」

「種を買ってきてさ、植えよう。そういえば、大根の種って袋に入っているやつ、いっぱい入っているよ、全部、植えたら、そこいらじゅう大根だらけだ」

「全部は育たないよ」

「そっか・・・。大根も生存競争、大変だ」

「まあね。さてと、焼いて煮込むのは幸がやりますか」

「うん、幸がやるよ」

幸が空の鍋を火にかけ、油を敷く。

「火の通りにくいジャガイモから炒めていきます。ね、お父さん、やっぱり晩ご飯は二人で作るのが良いね」

「そっか、最初は交代で作っていたもんな」

「そうだよ、あれはだめだ。一人で作るのは寂しいし、一人でご飯が出来るのを待っているの

はもっと寂しい。お父さんとお喋りしながら作るのが一番だよ」

「二人で作っている割には時間かかるけどね」

「それは仕方ない、父娘の大切なコミュニケーションの時間が入っているからさ」

不意に幸は男の背中に頭をごしごし擦りつけた。

「どうしたの」

「コミュニケーション。お父さんに幸の匂いを付けてる、お父さんは幸のなわばりだから、誰も手を出さなかってこと」

「ちょっと。お父さん、包丁持っているんだから危ない」

幸は笑うと、後ろから男を抱き締めた。

「いっぱい付いたよ」

男は包丁を離し、鍋のジャガイモを菜箸でひっくり返す。幸い、焦げずにすんだ。

「誰も寄って来ないよ、お父さんを好きだって言ってくれる女性は幸だけだから」

男は、切ったタマネギ、人参、ベーコンを入れ軽く炒める。

「それが不思議だ、こんなに素敵なのに」

「お父さんは自分の何処が素敵なのか全然分からないな」

「なら、幸が一日たっぷりかけて教えてあげるよ」

「幸が素敵だと言ってくれるなら、それで充分、それ以上は必要ないよ。さてと、この辺で水を入れれば良いのかな」

「はい、水とハーブを入れてください。後はじっくり煮込んでいくのですよ。よろしいですね」

「わかりました」

男が少し笑って答えた。

堀炬燵の横に鍋と炊いたばかりの御飯が入ったおひつを置く。幸は、炬燵の上にお皿やお箸を並べた、ふと、幸は大きな窓から外を眺めた。すっかり闇に閉ざされており、虚空に細い月が浮かんでいた。

「どうしました」

男が後ろから声をかけた。

「夜の空を見上げて、泣かなくてすむようになったなあって」

硝子窓に写る幸の表情はとても穏やかに虚空を眺めている、男は少し笑みを浮かべると、寒そうに炬燵にもぐりこんだ。

「お父さんも夜の空を睨みつけなくてすむようになったよ」

幸は、男の横に座ると足を延ばす。

「堀炬燵は足が延ばせていいね」

「だけど、隣に座らなくていいよ、三方、残ってるんだから」

「微妙にお父さんの顔が見えにくいのが難題だ」

幸は一度立ち上がると、左に男が見えるよう炬燵に入り直した。

「これならお父さんの顔も見れるし、お父さんと同じ方向を見ることができるよ」

「窓の外、真っ暗な天蓋に細長い月」

男は答えると、おひつから、御飯をお茶碗によそい出した。

「だめだよ。幸がやる、ほとんど、お父さんが料理を作ったんだから、あとは幸がやるよお」

男は少し笑うと、幸にしゃもじを渡した。

「美味しいね」

「そうだね、幸の美味しそうに食べる顔を見てるとなんかな、楽しい」

「そう言ってくれと、幸はとても嬉しい」

幸はくすぐったそうに笑う、ふと、思い出したように葉書を取り出した

「そうだ、これ」

「葉書・・・」

幸が取り出した葉書を、男が受け取る。

「あかねちゃんか。そういえば、次の日、住所を訊いていたね、表書きはお父さんかお母さんが書いてくれたんだな」

「ありがとうって」

幸がくすぐったそうに笑った。

「幸には初めての手紙かな」

「うん、でも、お父さん、いいのかな」

「いいのかって」

「あかねちゃんに迷惑かからないかな。私と縁が出来て、なにか危険なことに巻き込まれたりしないかな」

「難しいところだな、ただね、あかねちゃんが外神の依代に選ばれたのは、先天的にああいったのを受け入れる感受性が高かったからだよ。今後、新手に巻き込まれることもあり得るから、いくらかね、縁は繋いでおく方が良いかもしれない」

「それじゃ、返事を書こう。あ、この住所、電車で一時間くらいかな。会ったりもできるね」

「初めての友達だ」

「なんだか、『初めてのお使い』みたいで緊張するな」

「私さ、また、会おうねって書くよ」

「それがいいだろうね」

男が葉書を返すと、幸は大事そうにポケットの中にし舞い込んだ。

「お父さん、幸は満腹です。お行儀悪いけど少しだけ横になっても良いですか」

「どうぞ」

幸はにっと笑うと駆け出して、掛布をとって返し、男の膝を枕に寝転がってしまった。

「な、なるほど、そういうことか・・・」

「特等席だ」

「幸はいろんなこと、考えるなあ」

幸はくすぐったそうに笑うと、右手で男の顎に触れた。

「お髭、きちんと剃っているね、お父さんに髭は似合わない。だって、キスする時、幸の唇が痛くなってしまうもの」

「前後二つの文が繋がらない」

「いいのさ、だってキスするの邪魔だからお髭はやめてって言いにくいもの。お父さん、あのね」

幸はにっと笑うと、ふっと右手、人差し指で男の唇に触れた。

「ん」

「幸はお父さんのこと、ずっと考えている、思っている、幸はお父さんの専門家だからね。お父さんのことなんでもわかるよ。お父さん、幸のことで悩んでいるでしょう」

「幸」

男はかすれた声で呟いた。

「あれは幸がお願いしたことだし、幸は百年以上、汚く生きてきたんだ、心も体も、すっかり汚れてしまっているよ、どんなに洗ったって落ちやしない。だから、今更いいんだ」

「それは絶対に良くない、お父さんは幸がどんなふう生きてきたか、全てを知る由はないけれど、幸はね、お父さんが幸のこと、とっても大切に思っていることわかるだろう」

「うん・・・」

「それは、幸がお父さんにとって、とっても綺麗な女の子で、とっても綺麗な体で、とっても綺麗な心を持っていて、そしてなにより、お父さんのこと、大切に思ってくれているからだよ。幸、もっと自分自身を認めてあげなさいな」

「なんだか、幸は幸せすぎるよ」

幸は目を瞑り、唇をかんだ。

声がした。

・・・我が主より文有りき、御届候・・・

地響きのような低い声だ。

「ああ、どうしてこういう時に限ってなんだろう。お父さん」

「いつかさ、二人っきりで旅をしよう。そうしたら、嫌なのが寄ってきても逃げだせる」

「愛の逃避行だね」

「安っぽいドラマの見過ぎだよ、それは」

・・・我が主より文有りき、御届候・・・

先程よりも低く声が響く、炬燵の上で食器がかたかたと揺れた。

「音で結界を破ろうとしている、この重い力は鬼だな。父さん、行ってくるよ」

男は起き上がると、幸を炬燵に座らせた。

「幸はここから離れないこと、いいかな」

「でも」

「大丈夫、お父さん、強いからね。それに、外は寒い、幸が風邪をひいたら大変だ」

男はそっと幸の唇に人差し指で触れると、少し笑った。

「本当に、父さんは幸が大切だよ」

「お父さん」

男は幸を残して玄関口へ向かった。

戸を開け、門の前まで出る。男は門の前で見上げた。まるで怪獣映画だ。日本画から抜け出したような鬼が仁王立ちに立っていた。

男の背丈は鬼の膝ほどにしかないだろう。

「無茶なことを」

男が呟く。どれほどの犠牲を供物に鬼などを呼び出したのか。

「主殿か」

「私がこの家の主です」

「文を言付かって来た」

「それは読みたくありません」

「何ゆえ」

予想をしていなかった男の返答に鬼は目を剥き唸った。

「私はこの地で静かな日常を営む者、日々の暮らしの中で笑ったり泣いたりしながら、今の生活を楽しみ生きています。その文を読み、拘わりを持たば私の大切とする生活が適わなくなるでしょう。ですから、読みたくありません。そのこと、貴方の使役者にお伝えいただき、このまま、お帰りください」

鬼は男を瞬きせず睨んでいたが、不意にじわりと笑みを浮かべた。

「もう一つ、この旨、受けられぬ時は、殺してしまえと仰せつかった」

鬼は一気に右手を振り落とし、男をその巨大な爪でまっふたつに切り裂いた。声をあげる暇もなく、男は両断され地面に倒れて行った。

「なんとひ弱な主殿よのう」

「うおおおっ」

一瞬の雄叫びとともに光が走る、鬼の片腕が地面に落ち、虚空には長刀を手に髪を振り乱した幸が浮かんでいた。

「お前、何をした」

幸が目を真ん丸に見開き、歯を震わせ鬼に声をあげた。

鬼は絶句した。いきなりの状況に判断がつかずにいた。

「お前、あたしのお父さんを殺したな、殺したんだな、あははっ、ようし、お前を一寸刻みに切り刻んでやろう」

幸の眼からは涙が溢れ、狂ったように笑う口元からは涎が垂れ流れていた。

「お父さん、こいつを潰したらあたしも行くよ」

「幸、待ちなさい」

男が叫んだ、男は何事もなかったように門の前に立っていた。

「今のはただの幻術だ」

「あ、あ……。見ちゃやだあっ」

幸は両手で顔を隠すと、地面へと落ちて行く、男は駆け出すと、すんでのところで幸を受け止めた。

既に鬼は逃げだし、その腕だけが丸太のように横たわっていた。

「お願い、幸の汚い顔、見ないで」

男は幸を抱きかかえたまま、家に戻ると、そのまま器用にタンスからやわらかなタオルを取り出し、幸を炬燵に座らせた。

「さあ、顔から手を離しなさいな」

「やだやだ、お父さんにあんな顔を見られてしまったよ」

「気を静めなさい、肩の力を抜きなさいな。お父さんは幸のこと、とっても大切なんだからさ」  
幸が目を瞑ったまま、そっと両手を顔から離れた。

「ほら、涙に鼻水、涎。これは大変だ」

男は笑うと、タオルでそっと幸の涙を拭った。

「鼻、ちーんとしな」

んーっと幸がタオルに鼻を付ける、男はタオルを二つに折ると、幸の涎を拭いた。

「ほら、美人に戻ったよ。さっ、お風呂沸かそう、温まってきなさいな」

幸をお風呂に入れた後、男は窓から外をじっと睨んでいた。月は消え、茫漠たる闇が、硝子窓の外に広がっていた。

どんな、闇の中でも、たとえ、自分の身を犠牲にしても、守りたくて仕方がないものがある。

「お、お父さん……」

幸の声に、男は笑みを浮かべ振り返った。

「暖まりましたか」

「うん。ね、お父さん、本当にごめんなさい」

「え……。ああ、そうか。お父さんこそ、幸に心配かけてしまったな、ごめんね。そしてさ、助けてくれてありがとう」

男はそっと笑みを浮かべた。

「お父さんね、疲れた。片づけは明日にして、もう寝よう」

「ね、お父さん」

「どうしました」

「幸、お父さんのお部屋で寝たい」

「なんだか、幸、子供に戻ってしまったな。今日はしょうがない、布団、運んであげるよ」

男は笑うと、優しく、幸の頭をなでた。

男は暗がりの中、幸の寝息を確かめると、そっと布団から起きだし、部屋を出た。静かに襖を閉める。

手早く、普段着に着替え、腰の後、小刀を差した。

奴らは俺を敵対するものと見なしただろう、ならば、潰しておかなければ禍となる。

「お父さんってのは大変だな」

男が呟く、

「大丈夫さ、幸がついているよ」

振り返ると、幸も寝間着から普段着に着替え、「必勝」と書いた鉢巻きを締めていた。

「あああっと・・・、ええっと、うーん。参ったな」

男はどう言いつくろったものかと考え倦ねたが、ふと、瞬きもせず、自分を見つめる幸の眼を見て何も言えなくなってしまった。

「お父さん、幸はとっても幸せだ。幸せすぎるくらいだよ。幸はさ、自分自身でこの幸せを守ることでき、この幸せに値するようになるんだ」

男は幸の決意に驚いた。もう、立派な大人だ。

「怪我するなよ、気合い入れていけ」

「大丈夫、幸、かなり気合い入っているからさ、とっても強いよ」

「必勝・・・、なんだか、受験生みたいだ」

男はくすぐったそうに笑うと、幸の頭をなでた。

「行くぜ、幸」

「ああ、お父さん」

## 異形五話

---

ふうっっ、深呼吸をする。

笑顔、笑顔、口元、そう、頬の上辺りを引き上げるようにして、そうすれば極上の笑みになる。

さあ、行くぞ。

商店街の入り口、幸はぐっと握り拳を作ると商店街の中へと向かった。

「ええっ、スーパーの方が良いよ、買いやすいもの」

「だめ、幸はね、一人ででも色んな人と会ってお喋りしたり、自分の意志を伝えたり、そういう訓練しなきゃね、いつまでも、お父さんの後に隠れて買い物するわけにもいかないでしょう」

「でも、商店街っていちいち声を掛けなきゃならないし、スーパーなら何も喋らずに買い物ができるし」

「つまりはお喋りしなさいってこと、いいね」

男に言い含められ、幸は初めて一人で買い物にでかけたのだった。

幸はポケットからメモを取り出すと、じっと見つめた。

魚屋さん、八百屋さん、服屋さんに寄って、帰りがけに、たこ焼きを買って帰る、以上だ。大丈夫、なんてことない、よし

男は落ち着かず部屋の中をうろうろとしていた。一人で買い物を行かせたのはいいが、時間が経つほどに気掛かりになっていくのだ。うずくまってしまっていないか、いや、逆に何かしでかしていないか。

幸は内弁慶なところがあり、外へ買い物に行くと少し俯いて男の上着の裾を千切れるかと握り締める、よほど緊張しているのだろう。それを思い出すほどに男は不安になるのだ。

男は溜息を大きく一つつくとうつと電話に向かった。

「ひやあ・・・、お父さん、ごめんなさい、幸にはまだ無理ですよお・・・」

幸は魚屋の前でしゃがみこんでしまった。

人通りの中、いらしゃい、いらしゃいという亭主の大声、店の前で品定めをする女達、げらげらと大きな笑い声。

店女の二つなら負けとくよ、というかん高い声が響き渡った。

「ごめんなさい。これは上級者用です、幸は落第でいいです。人が声を張り上げていて怖いですが、入っていきません」

狭い通路をたくさんの買い物客たちが通り過ぎる。店の人達もそんな客たちを引き留めようと大声を張り上げる。

「幸ちゃん、幸ちゃんだろう」

幸が自分を呼ぶ声に顔をあげると、先程の店の女がにかっと笑って幸の前に立っていた。

「うひゃあ、美人さんだねえ。いま、センセイから電話があったよ、娘は買い物に来たでしょうかってね」

「お父さんが」

女は笑顔を浮かべ頷いた。

「さあ、そんなとこでしゃがんでないで立ちな」

幸がよろよろと立ち上がると、女はぱんっと幸のお尻をたたく。

「しっかりしなよ」

「は、はい」

「何年も病院に入院していてさ、やっところさ、家に帰れたんだ、これからはその分を取りもどさなきゃね」

「そ、そうですよね」

お父さん、そういう設定は始めに幸に言ってくれよと思いながらも、なんだかほっとしたのだろう、幸は安心して笑みを浮かべた。

女は幸を店の前まで連れて来た。

「何がいるんだい」

「あの、えっと・・・」

「おおっ、何処のお嬢さんだい」

店主が気づき、女に声をかけた。

「税理士のセンセイとこのさ、お嬢さんだよ」

「ほおー、女優さんみたいだ。センセイにこんな別嬪の娘さんがいたとはなあ。こりゃ、センセイも心配だ。俺だったら、絶対に一人で買い物になんぞやんねえ、虫がついたら大変だ、一日中見張ってるぞ」

「いらぬこと言っていないで、ほら、お客さん、待っているじゃないか」

女は店主を向こうに押しやると、幸に笑いかけた。

「だめな亭主でさ」

幸も笑顔を浮かべ、メモを取り出した。

「あの、お姉さん、鮭の切り身を、ください」

「え、お姉さんか、うん、そりゃお姉さんだ」

「なら、俺はお兄さんだな」

「何言ってんだよ、おっさんが。女同士の話に入ってくるんじゃないよ」

女は店主を蹴り飛ばすと、幸に言った。

「悪いねえ、男ってのはどうしようもないよ。そうだ、メモ、貸してごらんな」

「は、はい」

「シメジにタマネギ、モヤシ、これなら、鮭の包み焼きかい」

「はい、そうです。お父さん、好きだから・・・」

女はふっと涙目になり、前掛けで鼻をかんだ。

「かー、うちのガキどもにも聞かせてやりたいね。これからも親孝行してやりなよ」

女は手早く鮭の切り身を包むと幸に手渡した。

「新鮮だ、美味しいよ」

「あの、おいくら」

「いいさ、持って帰りな」

「でも」

「なんかもう、あれなんだよ。これからもさ、女同士じゃないと相談できないことはあたしに言いな、相談に乗るよ、まかしときな」

「お姉さん、ありがとう。でも、私、少しずつでも社会復帰して、お父さんに安心して欲しい、だから、お父さんにも、ちゃんとお金、払って来たよって言いたいから」

女は幸をがしっと抱き締めた。

「良い娘だよ、なんて出来た子だい。それじゃ、五百円だけもらっておくよ」

女は手を放すと、涙交じりに言った。

付いてやってやりたいけど、忙しい時間でね、と断りを言う女に頭を下げ、幸はその先にある八百屋へ向かった。

野菜って結構多いな、二人暮らしには。

幸は五個入りのタマネギの袋を見ながら考えた。

でも、日持ちするなら、次の日の料理に使えばいいし、それなら。

幸は先程のやり取りで少しは買い物に慣れたのか、落ち着いて考えていた。

「あんたがセンセイとこの娘さんかい」

「は、はい」

店番をしていたおばあさんが幸に話しかけて来た。

「いま、魚弦の佳奈ちゃんから電話があってね。センセイのお嬢さんが来るから声をかけてやってくれってさ」

「あ、ありがとうございます」

「あんたは生まれてからずっと入院していたのかい」

「は、はい」

「大変だったねえ、ちょっと、手を出してごらん」

「えっ」

「手相見が趣味なのさ、見せてごらん」

幸がそっと手を伸ばすと、おばあさんが拡大鏡を片手に幸の手相を見た。しかし、首を振り、どうも見当が付かないといったふうに顔をしかめる。

「ん・・・。ごめんよ、どう読んだもんか分からないねえ、こんなこたあ初めてだ。過去が見え

てこない」

「私の過去、秘密ですから」

幸は笑うと、そっとおばあさんを抱き締め、その耳元で囁いた。

偽者は好きに占えば良い、でも、あんたみたいな本物はだめだ。うっかりすりゃ、相手の魂を傷物にしてしまう、気をつけなよ、な。

幸は姿勢を戻し、タマネギとしめじとモヤシを取ると、硬直したままのおばあさんに声をかけた。

「これ、くださいな」

少し脅し過ぎてしまったろうかと、幸は反省しつつ、洋服店へ向かった。

通路ぎりぎりまで女物のブラウスなどが吊り下げられている。年齢層の高い品揃えだ。

幸はそっと覗き込むと女がいた、電話をしている言葉から店主だろうとわかる。電話が終わったのを見計らい、声をかけた。

「あ、あの・・・」

「いらっしゃい」

「あの、取り寄せてもらっていた・・・」

「電話あったよ、センセイとこのお嬢さんだね。この前、来てくれた時はセンセイの後ろにへばり付いて顔が見えなかったけど、今日は一人だ」

にかっと笑う、店主の口の悪さを思い出した。でも、裏がない快活な話し方で、却って好感を持つことができる。

「一人で行ってきなさいって・・・」

「センセイも大変だ、今頃、心配して、いてもたってもいられないだろうさ」

幸がくすぐったそうに笑うのを見て、店主が満足そうに頷いた。

「お入りな、お茶をしよう。この時間、うちは暇でね」

店の奥にある三畳程の小さな部屋、ちょっとした食器棚と小さな丸いテーブルと古びたラジオがあり、衣類など、商品は置いていない。

店主は幸をテーブルに座らせ、インスタントコーヒーの瓶を出す。手慣れた手つきで珈琲を二つ用意すると、一つを幸の前に置いた。

「砂糖とクリームは適当にね」

「はい」

幸は少しクリームを入れ、一口飲む。

「美味くもなんともないだろう」

「あの、いいえ」

「まずいなあ、って思いながら、癖だね、あたしも飲んでるのさ」

店主は幸の前に座ると興味深そうに幸を見つめた。

「名前はなんて言うんだい」

「幸、幸です。幸福の、幸という字です」

「親の愛情の詰まった名前だねえ」

店主は笑うと、一口、珈琲を啜る。

「あのセンセイ、あれでロマンティストだからさあ。でも、なんていうんだい、センセイも随分変わった、丸くなったよ。幸ちゃんのおかげさ」

「お父さん、以前は」

「ああ、そうか。何年も入院していたわけだし、そうだねえ。うちはセンセイに帳簿お願いしているわけだけどね、正確できっちりした仕事をしてきているんだけど、愛想がなかった、ほんと。えらそうにしているんじゃない。ただ、本当に愛想の「あ」の字もなかったのが、この前の二人で来てくれたときさ、少年みたいな真っ赤な顔して照れ臭そうに、娘の下着や服を一式揃えていただけませんか、ってもう、あたしゃ、吹き出して笑いそうになるの、こらえるの大変だったよ。ほんと、幸ちゃん、大切にされているんだねえ」

幸は恥ずかしそうに笑みを浮かべると俯いてしまった。

「やっと帰ってこれたんだ、幸ちゃんもこれから親孝行しなよ」

「はい、私もお父さんが好きだから」

幸がそっと珈琲カップを両手で包み込む。

「いいねえ、うちの娘や息子も幸ちゃんみたいに素直だったらね、いいんだけどさ。うん・・・」

「幸ちゃんは水仕事もしているのかい、洗濯とかさ」

「お父さんと交替でしています。本当は私の仕事だけど」

「うーん、手が少し荒れているじゃないか、寝る前にハンドクリームとか付けないのかい」

「え・・・」

「ああ、男親一人じゃしょうがないねえ」

店主は戸棚を開け、ハンドクリームを一つ取り出した。

「まだ、使っていないからさ、あげるよ」

「あ、でも」

「こんな別嬪さんなのに手荒れなんてもったいないよ。寝る前にね、クリーム、ちょっと取って、まんべんなく手に擦り込んで、そしたら手荒れしないですむよ」

「あ、ありがとうございます」

「いいよ、なんでも相談にきな、金のこと以外なら、話聴いてやるよ」

店主は笑うと珈琲を飲み干した。

「なんか、甘い物なかったかねえ」

「私、そろそろ。お父さん、心配してそうだし」

「あ、そうだね、それじゃ、あの紙袋に下着や靴下、普段着みたいなもの入ってるからね、袋、二重にしておいたから破れないだろう」

「ありがとうございます」

「いいよ、今回はあたしの見繕いだけど、幸ちゃんも、この生活に慣れたら、自分の好きなもの

選ぶと良いよ」

幸は笑みを浮かべると、会釈をし、店を出た。

「ちょ、ちょいと」

声を掛けられ、幸が振り返ると、八百屋のおばあさんが幸を手まねいていた。

「さっきはごめんなさい」

にと幸が笑う。

「あ、あんた・・・」

幸に駆け寄り、おばあさんが言った。

「あんた、神様かい」

「私に手を合わせていただいても、何の御利益もありませんよ」

幸は笑みを浮かべ離れる、後ろでおばあさんがありがたいありがたいと手を合わせていた。

幸は魚屋の佳奈を見つけると、たたと駆け寄った。佳奈もパイプ椅子に座り、一息ついたところだった。

「やあ、どうだった」

佳奈は幸を見つけると笑い掛けた。

「ありがとうございます、電話していただいて。皆さんに優しくしていただきました」

「そりゃ良かった」

幸は座る佳奈の前に立つと、そっと佳奈の手を取って笑顔を浮かべた。

そして顔を寄せ、耳元に囁く。

佳奈さん、悩まなくてもいいよ。人の考えてることが、自分のと同じようにわかるんだろう  
びくんと加奈が震えた。

父さんは電話で娘がと言った、あたしの名前言ってなかったろう。幸という名前は、あたしが表に置いている記憶が見えてしまったからだろう。ねえ、あたしの心、奥底まで見えるかい、見え  
ないだろう、お父さん以外には見せないと決めているからさ、似たもの同士、きっと、あたし達  
、良い友達になること、できるよ

幸が佳奈から顔を離す、佳奈はぎゅっと幸の手を握った。

「寂しかった」

佳奈が掠れる声で囁いた。

「今はどう」

幸が囁いた。

「心の底から元気が出ている、一人じゃないのは嬉しいもんだね」

「私もずっと一人だった、でも、お父さんと出会えて、今はとっても幸せ、幸せすぎるくらい  
です。それに、今日は佳奈さんにも出会うことが出来た、とっても嬉しい」  
はははと佳奈は快活に笑うと、いつものように元気を取り戻した。

「いつでも遊びにおいで。わるがき、二人いるけどね」

幸はにっと満遍の笑みを浮かべた。

「それじゃ、お父さん、家で心配しているから帰ります」

「いや、あれ・・・」

佳奈の指さす商店街の入り口辺りを男が行きつ戻りつしていた。

「お父さんだ」

「気づかれていないと思ってるんだらうねえ」

「お父さん、可愛いなあ」

「え、あれがかい」

幸はもちろんと頷くと、男へと掛けて行った。

男はここまで来たことを悔いていた。

大丈夫だ、佳奈さんは姐御肌で面白い能力も持っているから幸のこと、気遣ってくれるだろう、こんなところで幸に見つかったら、親としての威厳というか、なんというか。とにかく、家に戻って、平気な顔をしていないと。

幸がいきなり男を後ろから抱き締めた。

「不審者発見、不審者発見、至急、応援請う」

「あ、幸」

「あはは、お父さん、どうしたの、こんなところで、動物園の熊さんみたいに、うろうろしてた」

「いや、ちょっと買い物に」

「本当のこと、言いなさい」

「ん・・・、幸が心配でじっとしていられなかった」

「よく正直に言った、解放してあげよう」

ありがとうございます、あなたのおかげでたくさんの友人が出来ました

私はきっかけを用意しただけ。良かったですね。

ただ、私は長い時の中で、奴の喰いこぼした人の頬を、耳を、腕を、この口で食い続けてきました。こぼれた人の血で喉を潤してきました。私はなんてことをしてきたのだろうと悔いています。

悔いることを私は止めません、ただ、あなたに選択肢はありましたか、

死を選ぶことは出来ました

この場合の死は、人身御供と同じく、自身を滅すること

自身と他者を入れ替え思考を繰り返してください

あなたは少しずつ解に近づいていると思います

ありがとう、ございます

幸は男の前に立つと、にっと笑った、

「メモの通り買ったよ、タコ焼きは買うのやめたけど」

「え、どうして」

「ほら、お父さん、見てごらんよ。たくさんの方が歩いている」

「まだ、そうだな。人どおりが多い」

「こんな中で一時間、生き別れになっていた親子がやっと出会えたんだよ、途中の喫茶店で巡り会えたこと、ケーキで祝福するのもありだよ、そして、心くばりの出来る幸は喫茶店に匂いの強いタコ焼きを持って入るのは悪いかなと思うのですよ、お父様」

「なんだか、しっかりしたなあ」

「えへへ……。照れますう」

「もう一人で買い物も大丈夫か」

「それはだめ、幸はお父さんと離れると悪い女の子になってしまう、幸はお父さんと一緒じゃないとね、素敵な女の子でいられないのさ」

「なんかそれ、いろいろ、しでかしたのではと気になるけれど、まあ、そうだな、立ち話より喫茶店で聞けばいいか」

男は溜息混じりに幸から荷物を受け取る。幸は当たり前のように、男の腕に自分の腕をからめた。

「楽しかったよ、お父さん」

## 異形六話

---

この温泉街の中でも一番の高級ホテル。廊下には、プレートを掲げた重厚な扉が並ぶ。ふと、幸は、何か用事を済ませた後だろう、少し先を歩く仲居に気づき、音をさせず走り寄ると、後ろから抱き締めた。

「あはは、だーれ、だ」

「お、お客様、困ります」

低い声で幸が囁いた。

「なんだよ、寂しいなあ。あたしの声、忘れたのかよ」

「うっ、うわああ」

仲居は腰を抜かし、尻餅をついてしまった。幸は仲居の前に回り込み、にっと笑った。

「やっぱり、あの時の瞳さんだ。元気にしてた」

「は、はい。おかげさまで・・・」

幸もぺたんとして廊下に座ると、目を逸らそうとする瞳をじっと見つめた。

「転職じゃねえな、まだ、穢れた気配がある。ここで、何かあるのか」

「あ、あの、それは・・・」

「あたしさあ、十日間、父さんと旅をしてきたんだよ、湯治場で、できるだけ安上がりでさ。で、最後の日は思いっきり贅沢をしようてんで、このホテルに泊まってんだよな。あたしと父さん、いい気分で明日、チェックアウトできるかい。変なことにさ、巻き込まれたりしないかねえ」  
瞳は困ったように俯いてしまった。

「参ったなあ、そうなのかよ、しょうがねえな。うん、ところで、なんで、あんたなんだ」

「え・・・」

瞳がげげんそうに顔を上げた。

「あんた、実動部隊の指図する役だろう。指図されてんじゃねえのか」

一瞬、唇を噛み、瞳は俯いてしまった。

幸は無造作に瞳の顎を右手でくっと上げると、その目をにらみつけた。

「あんときの失敗で降格、平になって、二番手だったおっさんが今ではあんたの上司か。なんか、あたしのせいみたいじゃねえか、寝覚め悪りいな」

「いいえ、決してそうではなく・・・」

階段を上がってきたのか、足音がした。

「お姉ちゃん、やっと会えたね」

幸は笑みを浮かべ、瞳に抱きついた。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん、もう何処にも行っちゃ嫌だよ」

ぱたぱたと足音が寄って来る。

「お客様、なにか、従業員が粗相でも」

仲居が一人、あたふたと近寄ってきた。

幸は泣き濡れた眼差しで、近づいてきた仲居を見つめた。

「ごめんなさい、やっとお姉さんに会えたのが嬉しくて・・・」

「え、それは・・・」

仲居はとっさに状況が把握できずにいた、幸は立ち上がると、そっと仲居の手を両手で包み、その目を見つめた。

「名字は違うけど、生き別れていた私のお姉さんなんです。ずっと、探していて、やっとこのホテルに勤めているってわかって・・・」

幸はぼろぼろと涙をこぼすと、その仲居に抱きついた。

「やっと会えたのが嬉しくて。ごめんなさい、お仕事のお邪魔をして」

「そ、そうなの。良かったわねえ」

仲居は思わず心を揺さぶられ、貰い泣きをしていた。

「お母さん、ありがとう。あ、ごめんなさい、お母さんなんて言ってしまって、私、どうかしている」

幸は仲居の目を見つめ、涙を流したまま、そっと笑みを浮かべた。

「お母さんか・・・、久しぶりだねえ。くにのこと、思い出してしまうよ」

「お母さんにも娘がいるの」

「もう、長いこと、会ってないけど、どうしているだろうねえ」

「連絡取ってないの」

「嫌われているから・・・」

「そんなの、そんなの、絶対ないよ」

幸は仲居の目を見つめ、ぎゅっと手を握り締めた。

「色んな事情はあると思う、でも、心の底から嫌ったりなんか出来ないよ、ただ、素直になれないだけだよ」

幸は仲居の胸に頭を押し付け囁いた。

「葉書だけでも出してあげて。意地を張って返事は返ってこないかもしれない、でも、諦めなかったらきっと仲直り出来るよ」

「そうする、そうするよ」

仲居は嗚咽しながら、やっとのことで、そう答えた。

幸は振り返ると、瞳に寄りそい話しかけた。

「ね、お姉ちゃん、一緒に帰ろう、お父さんも悔やんでいるんだ。これからもう一度、三人で暮らそうよ」

「で、でも、仕事が・・・」

「何言っているんだい、妹さんがこんなにも・・・」

最後は言葉にならず、仲居は、泣き出してしまった。

「お姉ちゃん、908号室に泊まっているから、仕事が終わったら、とにかく来て。お願い、お願いだよ」

諦めたように瞳が小さく呟いた。

「戦線離脱か・・・」

「その方がいいんだよ、あんたにはさ」

幸がにいと笑った。

冒険に行ってきたと言いきり、部屋を出て行った幸が気掛かりで、男は部屋をうろうろと歩き回っていた。海が大きく望める和室の上質な部屋だ。それが却って男を落ち着かせずにいた。全くの貧乏性である。

「お父さん、ただいま」

ドアを開け、幸が戻って来た。

「ああ、お帰り。充実した冒険ができましたか」

「もう大変、人命救助はもちろんのこと、吟遊詩人になって、愛を詠ってきたよ」

「なるほど、充実した冒険だったわけだ」

男は笑うと、窓辺に設えられたソファに座った。幸は男の横に座ると男の肩にもたれかかる。

「もうちょっとで大航海に出るところだったけど、お父さんの顔を思い出して帰って来た」

「それは良かった、幸がいなくなったら父さん、泣いてたかも」

「どんなふうに」

「子供みたいに大きな声で泣いていたかもね」

「幸は船の上でも、お父さんの泣いているの、聞こえたら、空飛んで帰って来るよ」

男はくすぐったそうに笑うと、急須からお茶を二つ入れ、一つを飲む。

「十日間、本当に賑やかだった」

「ね、色んな人に会った。また、いつか会いたいな」

幸が男のいれたお茶を飲む。

「お父さん、湯治場での自炊生活は新鮮だった。あ、こういう生活もあるんだなあって思った」

「共同生活みたいなものだからね。御味噌の貸し借りとか、お醤油分けたり」

「みんなの住所、聞いておいたから、また、葉書を出そう」

「幸は人気あったからね。なんていうのかな、父さんはね、色んな人と会って、幸の世界を広げて欲しいと思っている」

「うーん。幸はお父さんとうまく喋っているのが一番嬉しい。だから、本当はお父さんさえ居てくれれば狭くてもいいんだ。でも、お父さんの望むことしたいし、うまく出来て、お父さんが喜んでくれたら、とっても嬉しい」

「それはなかなか複雑なこと」

「乙女心は複雑怪奇なのです」

幸は眩気に笑うと、両足を男の太ももの上に投げ出した。

「幸はただいま充電中です」

ふと男は真顔になり幸を見つめた。

「ごめんなさい、これはやり過ぎだった」

「幸、父さんの膝の上に座ってくれるか」

「え・・・、あ、うん」

幸は男の膝に横座りになると、そっと男の顔を見上げた。そのまま、男は幸を抱き締めると、幸の耳元で囁く。

「今日で幸に名前をつけて一年が経つ、誕生日おめでとう。この一言をね、旅の間、ずっと言いたかったんだけどね、面と向かっては恥ずかしい、でも、幸の出来るだけ近くでそう言いたかった」

「ありがと・・・、お父さん」

「幸は一年でとっても成長した。とっても聡明で素敵な女性に成長したよ」  
言い終えて、男は手を放した。

「もう、降りていいよ、ありがとう」

幸はそのままの姿勢で男を見つめる。

「お父さんもしっかり、幸のお父さんになってくれたよ」

「ありがと、その言葉、とっても、父さん、嬉しいよ」

幸は男の胸に顔を埋め囁いた。

「幸はお父さんを食べてしまいたいくらい好き。ほんとにもう、食べちゃうぞ」

男は幸の頭を優しくなでながら笑いかけた。

「父さん、食べられちゃうと、幸とお喋りできなくなってしまうよ」

「それじゃ、食べないで我慢してあげる」

幸は両手をのばし、男を抱き締めると、静かに静かに泣きだした。

男はホテルのロビーにある喫茶店で珈琲を注文した。たくさんの人達が行き交う。席も七割がた埋まっていた。

人を辞めた奴らが多い、心臓の代わりに仕込んでいるのは、呪宝具。呪いのかかった宝石、神木の破片、古代の指輪、倉庫屋ということか・・・

「お父さん、やっと見つけた」

「ん、幸、おはよう」

幸は男の横に座ると、少し拗ねたように男をにらんだ。

「ソファで一人寝ていた。起こしてくれればいいのに。お父さん、捜し回ったんだよ」

「起こすのは無理、だって、泣きながら眠ってさ、あんな可愛い寝顔、起こすのはもったいない」

「お父さんったら、もう。そういうのは平気で言えるくせに」

幸が照れながら言う、男がそっと笑った、

「何か頼みなさいな」

「お父さんと同じ珈琲にするよ、カウンターで注文してくる」

男を置いて、幸はカウンターへ向かった。男はしばらく幸の後ろ姿を眺めていたが、不意に俯くと、腰の後ろに手をやった。

良い運動になるか・・・

「お父さん、ケーキも二つ頼んで来た、シヨコラ、美味しそうだったよ」

「珈琲にはちょうど良いね」

幸は男の横に座り、話しかけた。

「なんか、お父さん、変」

「可愛い娘に変と言われてしまうとはとっても哀しい・・・」

男は少し笑うと幸に囁いた。

「左目、瞑りなさい」

「うん」

男は幸の左目をそっと指先で触れ、そして、離れた。

「目を開けて、辺り、見渡してごらん」

幸の左目に男が見ている情景が映る、半数ぐらいになるだろうか、心臓の無い人間たちが、笑顔を浮かべ行き交っていた。

「なんなんだ、これ」

幸は小声で呻いた。

「人には欲望がある、金持ちになりたいとか、有名になりたい、他人から称賛を浴びたい。色々な欲望がね」

「それがどうして」

「魔術師や術師は彼らの願いを叶えてあげようと囁く、ただし、心臓を預かせてほしい、そして、数年の間、その抜け穴に呪宝具を保管させてくれと言う。時間が経てば元どおり心臓を返すからと言ってね。ただ、多くの呪具宝は人の魂を食らう」

「だますってこと」

「確かに金持ちにもなるし彼ら、心臓を渡した奴らは喜ぶよ、でも、数年経てば、彼らの魂は消滅し、ただの人形として魔術師たちの道具になってしまう。つまりは思いっきり騙しているわけだ」

男は俯くと、そっと目を閉じた。

「お父さん、泣いているの」

「人は・・・、弱くて仕方がない。もっと賢明であればいいのにな」

幸はぎゅっと男の手を握った。

男はしばらくして顔をあげると、幸に囁いた。

「今夜は部屋に結界を敷いてしまおう」

「何があるの」

「呪宝具のオークションが開催されるだろうと思う。たくさんの呪宝具が一同に集まる。その影響で頭痛くらいで済むかどうかわからないからね」

ふと、幸はロビーを横切る仲居の姿を見つけた。幸がお母さんと呼んだ仲居だった。しかし、先程とは違い随分苦しそうに歩いている。良く見ると、頭や肩に黒い埃のようなものが被さっていた。

「お父さん」

「いいよ、行ってあげなさい。縁が出来たのだろう」

男は少し笑顔を浮かべると、珈琲を啜った。

「お父さんはどんな奴からも幸を守るから安心しなさい。さ、行きな」

幸は頷くと、その仲居に走り寄った。

「お母さん、大丈夫」

幸は仲居の前に立つと、心配そうに声をかけた。

「さっきの妹さんだね。今夜ね、葉書を書くよ」

苦しそうにしながらも笑顔を浮かべる。

「苦しそうだよ、どうしたの」

「はは、どうしたもんかねえ、疲れが急に出了たみたいでね」

幸は仲居をロビーの陰にやると、そっと後ろに回り、仲居の頭と肩を払う。幸の手を避けるように黒い埃が落ちて消えて行く。そして、最後にそっと背中をさすった。

「どう、少しは楽になった」

「あれ、どうしたんだい。平気になってしまったよ」

「良かった、お母さん、あまり無理しちゃだめだよ」

幸は仲居の前に立ち、そっと笑いかけた。

「誰かに背中をさすってもらおうと体も心も楽になる。今ね、私は本当のお母さんだと思って背中をさすったんだ。だからね、お母さんの本当の娘が背中をさすってくれたら、もっと素敵だと思うよ」

幸は髪の毛を一本抜くと、仲居の手首に巻き付けた。

「お守りあげる」

「ありがとうね、本当にありがとう。今日はなんて良い日なんだ」

「それじゃね」

幸は小さく手を振ると、男のところへ戻って行った。

男はそっと幸の頭を撫でた。

「とっても幸は良い子です」

「お父さん、また、泣いている」

「だめだな、一度泣くと癖になってしまう」

「素直に泣けるお父さん、好きだよ」

「それ以上言うな、顔上げられなくなってしまうよ」

「お父さんは感激屋さんだ」

幸は幸せそうに男を見つめると、男の手にそっと手を重ねた。

男はひとつ大きく息をすると顔を上げた。幸がそっと男の目許をハンカチで拭った。

「ああ、父さん、なんか格好悪いな」

男は一口、コーヒーを飲み、少し笑った。

「もう大丈夫だ」

「お父さん、商店街の人達に言われてるよ」

「なんて」

「明るくなって付き合いやすくなったって」

「そうかもしれないな、以前より、感情が表にでやすい。多分、それは父さんが幸せだからだろうな」

「それは幸がいるからなの」

「そうだよ」

「それはとっても嬉しい。幸がお父さんの隣にいてもいいってことだから」

幸はにっと笑うと男の肩に体を預けた。

「お客様、こちらの方が御同席をご希望されているのですが」

「あ、瞳さんだ」

その声に、幸は顔を上げた、しかし、一瞬、目を見開くと跳ね上がるように立ち上がった。

「あんた、それ、どうしたんだ」

あわてて、幸は自分の口を押さえた。

「幸、言葉遣いは丁寧だね」

「ごめんなさい」

男はくすぐったそうに笑うと、瞳の隣りにいる初老の紳士を見上げた。

「これは懐かしい、私が子供の頃、親父の元で修行していた時以来ですね」

男は笑顔で立ち上がると、紳士に前の座席を勧めた。

二人は席に着くと笑顔で会釈をする。

「幸、その女性の手をしっかりと握っておきなさい」

「はい・・・」

「しかし、驚きです。私はこんなおっさんになってしまったのに、神崎さんは私が子供の頃そのままですよ」

「健康には気をつけておりますのでな」

「なるほど」

男は含み笑いを浮かべると、じっと紳士を見つめた。

「それで、御用件は」

男が囁くように言うと、紳士は笑顔のまま答えた。

「今日は一晩、ゆっくりとしていただきたいと思ひましてな」

男は辺りを見渡す、いくつかの目が、魔術師達だろう、男の一挙手一投足に意識を集中していた。

「準備万端のようですね」

「私、臆病でしてな、準備は十二分にしておきたいのですよ、特に貴方のような方にお目にかかる時には」

「私は娘に災いがなされない限りは、旅行客としてゆっくりするつもりです」

「娘・・・、こちらの方はお嬢さんでしたか、また、なんとお美しい」

「私には過ぎた娘です」

「して、お名前は」

「娘の名前は秘密です、私、娘を溺愛しておりますので、男性には娘の名すら言いたくないのですよ、愚かな親とお笑ください」

「いやいや、これ程の美しいお嬢さんならそれも致し方ないこと、失礼致しましたな。つい懐かしい顔を見かけたものですから」

紳士はゆっくりと席を立ち上がる、男は紳士が立ち上がり切ったところで話しかけた。

「こちらの仲居さんはどうも神崎さんの部下のようですね」

「そのようなものですな。いや、以前はこれも優れた弟子だったのですが、不意に意気地をなくしてしまいよりまして」

紳士は否定もせず、世間話のように答えた。

「ただけませんか、彼女を。娘が執心しておりますので」

「こんなものでよければどうぞ」

紳士は厄介払ができたとでもいうように笑った。

「もちろんのこと、彼女の心臓も返していただきたい」

「代わりに何をいただけますかな」

「何が欲しいとおっしゃいます」

「ですな、無難なところでお腰の刀などいただけるとありがたい」

「これは私が数年前に買い求めたもので、なんのいわくもない刀ですがそれでよろしいのですか」

「いや、貴方がこの刀を使うのは多くのモノが知っております。面白いではありませんか、ある日、貴方の心臓にその刀が突き刺さっていけば」

男は愉快に笑うと、腰から刀を鞘ぐち抜き、紳士に手渡した。

「それはとても楽しいお話を聴かせていただきました。ありがとうございます」

「それでは」

紳士の体が薄れ消えて行った。

男は女性の胸で心臓が鼓動しているのを確認し、ほっと一息ついた。

「お父さん、今からでもあいつ殺しに行くよ」

幸が紳士の消えた後を睨みながら囁いた。

「奴はとても臆病だから、死ぬとでもなったら、たくさんの人達を平気で道連れにする。今はまだやめておいた方が良い」

「わかった」

「それより、瞳さんだったかな、部屋へ連れて行こう。まだ、しなければならぬことがあるでしょう」

幸も立ち上がると瞳に笑いかけた。

「お姉さん、一緒に行こう」

「もう、何がなんだか・・・」

蹲りそうになる瞳を幸は支えると、くすぐったそうに笑った。

「お姉さんの生命は幸が預かった、諦めな」

部屋に戻ると幸は瞳をベッドに寝かせつけた。ベッドルームもあるのだが、幸はベッドに寝ることができずにいたため、部屋をそのままにしていたのだった。

「幸、彼女の家族は」

「夫と子供、男の子が一人」

「どうか、お願いします。家族には危害を加えないでください」

男は柔らかな笑みを浮かべると、瞳に語りかけた。

「もともと、貴方はこちらの世界の住人ではないのでしょうか。少し時間はかかりますが、私は貴方を居てしかるべきところに帰そうと思っています」

「幸、まずは彼女の家族を保護しなさい、二人を捕捉できますか」

幸は瞳の額に手を触れ、その目を透かすように見つめた。

「いま夫は会社、子供は保育園にいる」

男は両の手のひらを上に向け、ふっと息を吐く。そうすると、まるで始めからあったように、硝子細工の鈴が二つ現れた。

「この鈴を二人の魂に繋ぎなさい、そうすれば万が一危機に瀕しても音がそれを伝えてくれる」

幸は男から鈴を受け取ると、まるで水に手をいれるように瞳の顔に手を入れて行く。

「あ、ああっ」

「大丈夫だよ、瞳さん、痛くもなんともないでしょう」

「は、はい。変な感じですが、痛くはないです」

「お父さん、繋いだよ」

「それじゃ、次は、彼女を裸にしなさい」

そう言うと男は背を向けた。

「とにかく、瞳さん、自発的に脱いでください。幸、手伝いなさい」

「お父さん、どうしてあっち向くの」

「父さん、男だからな。女性の裸を見るのはよくない」

「お医者さんは女の人の裸も見ろよ」

「お父さんは医者じゃないし、それに幸以外の女性の裸は見ないように・・・、いや、そうじゃなく、なんていうか」

「お父さんのそういう少年みたいなところ大好き。後で、部屋付の露天風呂、一緒に入ろう」

「父親をからかうな」

幸は嬉しそうに笑うと、瞳を立たせた。帯をほどき、着物を脱がせて行く。瞳は幸がするのを逆らわず裸になっていった。

「裸にしたよ」

「なら、ベッドに寝かせなさい」

幸は頷くと瞳をもう一度、ベッドに仰向けに寝かせつけた。

「これから、私はどうなるのでしょうか」

「教えない」

にっといたずらっぽく幸が笑う。

「幸、こういう状況で不安にさせないように」

男は相変わらず壁を見つめたまま幸を叱る。

「ごめんなさい」

「瞳さん、申し訳ありませんね。この子はまだ子供で。幸」

「はい」

「つま先から、頭、指先ももちろん精査して、埋め込まれた異物をすべて取り出しなさい」

「わかった。さあ、瞳さん、痛くないからね」

幸はまるで水に手を入れるように、瞳の体に、その両手を入れ、揺らめかせる。

「両足に二つ、お腹にひとつ、心臓の裏には二つも小さな爆薬が埋め込まれている」

幸は、一つ一つつまみ上げるように瞳の体からそれらを取り出して行った。

「首の後ろ、これはホルモンを分泌している、あと、これは脳の最深部に入っている。電気信号を遠隔で操作できるようになっているよ」

「感情を操っているんだらうな」

男が答えた。

「でも回りの細胞が少し破壊されていて、今は機能していないよ」

「実験だったんだらう。うまくすれば忠実なロボットになる」

「お父さん、全部取ったよ」

「後はお風呂で穢れを流し落として来なさいな」

「お父さん、瞳さんの着替え、幸のでもいいかな」

「そうしてくれるかな」

「うん」

幸が素直に瞳を促し、露天風呂へと向かった。

男は先程の紳士が今回の呪宝具オークションの主催者だろうと考えていた。奴は何を企んでいる。何を得ようとしている。

幸は瞳の体をシャワーで流しつつ丹念に洗う。

「ま、前はいいです、自分で」

「ああ、なんか、幸、えっちな気分になって来た。ああん、お姉様あ」

「ごめんなさい、勘弁してください」

幸はくすぐったそうに笑うと、瞳の言葉に関係なく彼女の全身を洗って行く。

「頭痛も肩凝りも消えて行くだろう」

「は、はい。とても体が軽くなって来ます」

「その軽さがあんた本来の体の重さだ。随分と穢れが体の中まで染み付いている。大方は取るけど、後はあんた次第だな」

そして、瞳を湯船につからせると、幸も入った、十人程度は充分に入ることができるこの岩風呂からは、海に沈む夕日が独り占めできた。

「贅沢だねえ、旅の予算のかなりがこのホテルの宿泊代だ」

「あ、あの」

「ん、どうした」

「どうして、私を助けてくれて・・・」

「ああ、あんたが真面目すぎるからだ」

「真面目って」

「真面目な奴は、真面目に深みにはまり込んで行く、ちょっとやめておこうかななんて浮気せずにひたすら真面目に落ち込んで行く。そういうのが歯痒くてね。それがきっかけかな」

「私は真面目過ぎますか。そうかもしれない」

「過ぎるのは良くない。それに二度会うのも縁があったってことだろう。あんまり難しく考えるな、あたしもそんな考えて行動しているわけじゃない」

「それからな」

ふっと幸は思い出したように呟いた。夕日は半ば以上、海に沈み込み、天蓋はそれでも紅蓮に燃えていた。

「あんたがさっきの野郎に命令されて、秘密を探りに来たことなんざ百も承知だ、父さんもあたしもな」

瞳は、一瞬、目を見開き、脅えたように俯いた。

「今日最初に会ったのは偶然かもしれない、ただ、それをあんたは野郎に報告をする、そしたらさ、今の状況は必然になる。なあ、あたしはあんたの家族を守ってやる、あんた自身の体も異物を取り除き、命も安泰だ。他に何が必要だ。あんたがあ野郎と決別するにはさ」

瞳は唇をかみしめ、俯き続ける。

「勇気を持ちな。悔いのないようにさ」

男は困惑していた。瞳が男の前で土下座していたのだ。

「お願いですから、顔を上げてください」

男は瞳の前に正座すると、少し引きつった笑顔を浮かべた。

「まずは顔を上げてください、それからお話を承りましょう」

男は他人に頭を下げるのは嫌いだが、それ以上にこういう状況を苦手としていた。

幸も困ったように見つめていたが、しょうがないと吐息を漏らすと、瞳に話しかけた。

「姉さん、顔を上げてさ、気楽にね、そうじゃないと話が進まない」

瞳はやっと顔上げると、おずおずと話した。した。

「救っていただきありがとうございます。この御恩は」

「あの、そういうのいいですから」

男は困ったように手をぱたぱた振ると、しばらく考え込んだが、

「私は正義の味方でもなければ、善人でもありません。ただのお節介ですから、特に気にしていただく必要はありません。それと、瞳さんでしたね、先程から、以前何処かでお目にかかったような気がするのですけど」

「ごめんなさい、お父さん。まだ、言ってなかったけど」

幸が困ったように男に言った。

「あの時の、ほら、外神の時のおばあさんに変装していた・・・」

「あ・・・、あの時の人か・・・」

「申し訳ありません」

瞳が畳に額を擦り付ける、

「いや、あの、いいですから。貴方の立場もあったことでしょうし。ですから、顔を上げてください」

幸がくすぐったそうに笑った。

「本当に、お父さん、こういうの苦手だね」

「幸、傍観者づらしないように」

幸は笑うと、瞳の横に座った。

「瞳さん、ちょっとお茶飲も」

幸はお茶を入れると瞳に差し出した。

瞳はお茶を飲むと、やっと顔を上げた。

「まっ、瞳さん。十日間ほど、一緒に暮らしていただきます。その間に、体と精神を普通の人程度まで浄化しましょう。それと、今後、ご家族で生活して行かれる中で、呪的干渉を受けないよう工夫します。それで、きっぱり、この世界から縁を切れればいいでしょう」

「ありがとうございます。本当にありがとうございます」

「いいえ、どう致しまして」

男はほっと一息つくと自分でお茶を入れ、一口飲む。

「幸、昼間の奴はさ、父さんの親父のライバルだったんだ。当時、親父は先を越されたと悔しがっていたよ」

「因縁があるの」

「っていうかね、親父は権勢欲が強くてね、一大流派を作ろうとしていたんだ、自衛隊にね。閉鎖的で上意下達がしっかりしている組織だとやりよいからさ」

「そういう意味か・・・。それじゃ、瞳さんも」

「最初は直属の上司に奨められてでした」

瞳が、ぼつりと呟くように言った。

「精神修養によいと聞かされて・・・」

「そんなところだろうな。いずれは斬ることになるかな」

「お父さん、かなり怒っている」

男はふっと笑うと肯定も否定もせず立ち上がった。

「お父さんね、せっかくだし、露天風呂だけ入っておくよ」

「それじゃ、幸はフロントに事情を説明してくる。行こう、姉さん」

「あの、何を・・・」

「今から帰る準備。まだ、この時間なら帰りの列車もあるだろうし」

幸は当たり前のことのようにして答えた。

「瞳さんも荷物があるでしょうし、幸と一緒に行ってください。今夜はオークションがあるので、呪宝具の。奴がそれを主催する」

「は、はい」

「あれだけの呪宝具が集まる、これは奴にも幾分荷が重すぎるかもしれない。その上、私と幸が泊まっていたら、奴は監視と抑制用に半数は手下をこちらに回してしまう。呪宝具が暴走すればこの辺りが焦土と化してしまうかも知れませんが、それを抑える余力を奴に残しておくためにも、私達はここにいない方がいいのですよ」

そう言い残して、男は露天風呂へ向かいかけたが、はっと気づき幸に声をかけた。

「幸、絶対に」

「え、なに」

「泊まらずに帰るんだから宿代負けてとか言わないようにね。そういうの、恥ずかしい」

「はは、言うつもりだった。わかった、お父さんに恥ずかしい思いはさせないよ」

男は溜息を漏らすと部屋付の露天風呂に向かった。

漁船の灯火だろうか、

男は露天風呂に肩まで浸かりながら、夜の海を眺めた。そして、天蓋は満天の星空。

ああ・・・、思わず溜息が出てしまう。

その空に一瞬、一筋の光がきらめいた。

男が左手をその光に向ける。

男の左手には、刃先を心臓に向けた男の小刀が握られていた。

「本当に突き立てようとしたとはな」

男は呟くと、小刀を横に置き湯船で顔を洗う。

「急かせなくても帰るさ」

男は呟くと、もう一度空を見上げた。

静かだ・・・。なあ、親父、あんた、先越されて良かったと思うよ。さすがにさ、あんなふうにはなって欲しくないからな。

「ここは部屋風呂、大浴場の方へお願いできませんか」

男が振り返ると、十人はいるだろう、覆面で顔を隠した男たちがナイフ片手にして男に今にもとびかかると構えていた。

「風呂上がったら帰ります。ですから見逃していただけませんか」

「女の縛りを解かれた以上、今後、貴様は障害になる、早めに潰しておくのが得策と仰せつかつ

て来た」

男の一人が答えた。

「神崎さんも相変わらず腹が小さい」

男は呟くと、声を発した男を見上げた。

「私を殺すつもりなのですが、それは無理ですよ。貴方の足は棒になってしまったから動かない、腕もほら、関節が固まってしまったでしょう。他の皆さんもそうですよ、体が固まって動けなくなってしまった」

男は湯船から上がると、何事もなかったように体を拭き服を着ると部屋へ戻った。

部屋に入ると、瞳が腰が抜けたように座り込んで震えていた。

「どうしました、彼らなら殺してはいません。半時間もすれば暗示が解けますから、それまでに帰りましょう。ん、幸は」

「あ、あの・・・」

ふと、男は入り口のドアが袈裟懸けに両断されているのを見た。

「ええっと、これは困ったな。瞳さん、オークション会場はどちらです」

「さ、最上階のホールです」

「では、行きますか」

男は瞳に肩を貸し立ち上がった。

男は幸の片手を、両腕、体全身の力で受け止めた。

なんて力だ・・・。

幸の剣先は仰向けに倒れた神崎の首、寸前にある、

「お父さん、こいつの首を刎ねる」

鋭い目付き、唇を結んだ幸の顔は神々しく思えるほど美しかった。

たくさんの参加者たちは幸の気配に弾かれ、後ろの壁にへばり付くようにして震えている。

「神崎さん、次はもう俺では抑え切れない、もちろん、この子を制止できる奴なんて何処にもいない、わかるだろう」

「わ、わかる、わかる」

神崎は脅え、後退りしながら喚いた。

「なら、今後、一切、かかわるな。あんたが手出さなければ、こちらからもかかわらない。」

「わかった、もう、一切、手は出さない」

「もしも、約束を破ったら・・・、これは言うまでもないな」

男は一瞬、腕を引くと、力の流れを変え、幸の懐に入り込むと右肩を幸の腹部に合わせ、力の向きをずらしながら立ち上がった。

男は幸を右肩にかつぎ上げる。

「さあ、帰るよ、幸」

「でも、でも」

「父さん、幸が人を殺して、幸の魂に傷が付くのいやだ」

「あたしはもう数え切れないほど人を殺している、今更、一人くらい増えてもかわらないよ」

「だめ、幸は生まれ変わって父さんの娘になった、とっても大切な娘にね」

男はばしっと幸のお尻を叩いた。

「痛いよお」

男はくすぐったそうに笑った。

「いい音がした」

「お父さんのえっち」

男は嬉しそうに笑うと歩きだす、そして蹲ったままの瞳の横を一步行き過ぎ立ち止まった。

「瞳姉さん、手え出せ」

幸は男の担がれたまま、瞳に笑いかけると、思いっきり両手を瞳に差し出した。

瞳はぎゅっと唇を噛むと両手を幸に差し出した。

しっかりと幸が瞳の両手を握り締める。

「一緒に帰ろう」

幸はにと瞳に笑いかけた。

「お父さん、移動するよ」

「ああ、頼む」

一瞬で三人の姿が消えた。

夜の列車の中、幸は窓側に座る、その向かいには瞳がいた。男は幸の隣りでお茶を飲んでいる。

「私は変わることができるでしょうか」

男は眠り込んでいる幸の顔を覗き込む。

「瞳さん」

「はい」

「心配しなくても大丈夫、無理やりにでも幸に変えさせられてしまいますよ」

「そうですね」

少し困り顔で瞳が頷いた。

「幸も家族が増えたようで嬉しいのでしょうか。縁とは不思議なものですね」

「本当に」

「短い間かも知れませんが、幸の姉になってやってください」

瞳は初めて安心したように笑顔を浮かべた。

「瞳姉さん」

少し寝ぼけ眼で幸は瞳を見つめた。

「瞳姉さん、お父さん、とっちゃやだよ。お父さんは幸のだからさ」

「取らないよ、もっとカッコ良ければわからないけど」

「うーん。ほんと、お父さん、幸以外、誰もお父さんがカッコいいの、わかってくれないよ。困ったな」

「お父さん、もてたらどうする」

「ん・・・、ライバルがない方がいいのかな。それじゃ、今でいいや」  
男はくすぐったそうに笑うと幸の頭を優しくなでる。

「不思議なものだと思いますよ」

男はそう言って列車の窓を見る。窓には三人の顔が映っている。

本当に不思議なものだと男は思った。

## 異形七話

---

窓からの月明かり、瞳はそっと幸の寝顔を見つめた。

幸と瞳はこの十日間、一つの部屋に布団を二つ並べ寝ていたのだ。

明日が、ちょうど、十日目、明日の昼には幸に付き添われ自宅へと戻る予定だった。

瞳は上半身を起こし、そっと幸の顔を覗き込む。

月明かりに照らされた幸の、なんて神々しく美しい、それは人の域を遥かに越えた美だった。

「キスはやめてくれよ。あたしは父さん、一途なんだからさ」

幸は目を開けるとにっと笑った。

「ごめんなさい、起こしてしまって」

「いいさ、こんな綺麗な月を見ずに寝るのはもったいない」

窓からの月は冴え冴えと部屋の中を照らし出す、十分な明るさだった。

幸は立ち上がると、瞳に待ってなと言いつつ残し、台所へ。そして、お盆にマグカップを二つ載せ戻ってきた。

「カルアミルク。アルコール入っているから、その内、寝てしまうだろう」

瞳はありがとうございますと言い、一口、カルアミルクを飲む。

「瞳お姉ちゃん、ここでの生活、楽しめたかな」

幸があどけなく瞳に囁く。

瞳がくすぐったそうに笑った。

「どっちが本当なの」

「え、何が」

幸があどけなく笑みを浮かべる。

「伝法な啖呵口調と可愛い女の子的なそれと」

「どっちも本当だよ。でも、お父さんにはとってもとっても可愛い娘でいたいから、必ず可愛くお喋りする。お父さん以外はその時の気分かな、たまに使い分けてもいるけどね」

幸は笑顔を浮かべるとカルアミルクを一口飲む。

「面白えだろ、そういうのさ」

にいと幸が笑う。

「幸ちゃん、それ怖すぎる」

「ごめんなさい、瞳お姉ちゃん」

くすぐったそうに二人が笑う。

ほっと溜息をこぼすと、幸はマグカップをお盆に置いた。

「出会って面白いもんだなあって思うよ」

ふっと幸が呟いた。窓からの月がそんな幸の横顔を玲瓏と映し出す。

「敵だった私なのに、本当に幸ちゃんや先生には助けてもらって、ありがとうございます」

「別に親切や善意で助けたわけじゃない。そんな気持ちで人を助けようと思ったら、限がなくてさ、こっちが参ってしまう。だから、たまたま偶然、助けただけだということにしている。そういうことだから、瞳姉さんも私やお父さんに感謝する必要はないんだ」

「難しいね」

「まあね、世界を牛耳る力があっても、そういうのは大変だし、柄じゃない。だから、お父さんも私も、基本、引き籠もりくらいがちょうど良い」

窓から月を見る。普段よりもその月は大きく、まるでその鼻面のクレーターまで見せようとするかに思える。

「瞳姉さんはこれからどうするの。自衛隊も退職したんでしょう」

瞳は少し目を伏せ考える、やがて顔を上げた。

「専業主婦をすることにした。隆も母さんに、実の母さんにね、面倒見てもらえばなしだったし、随分と負担かけてしまった。贅沢しなければ、隆行さんの稼ぎで食べて行けるから。それでいいなと思う」

「なんだか、一年前からでは想像できないな」

幸がくすぐったそうに笑った。

「結果としては幸ちゃんにあれだけ脅されて良かったんだと思う。脳に設置されていた機械の周りが壊死していたっていうの、間違いなく幸ちゃんに脅された時に壊死したんだと思うよ」

瞳はそういうと少し笑った。

「駄目押しが効いたかな。あの時、お父さんが大変だったし、思いっきりかましとかなきゃ、反撃されると思ったから」

「それで私も正気に戻ったんだと思うよ。正気に戻ったら、私なんでこんなことやってんだろうと思ったけど、逃げ出す勇気がなかった。毎日、びくびくして暮らしていた」

「心臓が破裂したら終わりだものね」

瞳はただ頷いた、一瞬、その恐怖が蘇り、言葉を発することができなかったのだ、なんて異様な世界にいたのだと改めて思う。

「人の生命があまりにも安易に扱われている。他の生命がとても軽いものとして見られている、その観念はいまそこいら中に広まってきている。難儀だねえと思うよ。いや、そうじゃないな、少なくともこの国の人間は、随分と昔から、他人の生命を軽く見積もってきた」

「幸ちゃんって、いったいなにもものなの。まるで人ではない、妖精とか神様のように思えることがある。商店街のおばあさんは神棚に幸ちゃんの写真供えて拝んでいるし、私にまで、ありがたいありがたいって合掌された」

幸は小さく笑うと、困ったように俯いた。

「あれは失敗だったな、少しばかり脅し過ぎた」

「いたずら、したってこと」

「おばあさん、手相占いが趣味のようだけど、あんたはたやすく人を占っちゃいけないよってのを、少しね、低い声で言った」

「あ・・・、それ、おばあさんの気持ち、手に取るように分かる」

「あれは反省している。機会見つけてゆっくり話をしてみるよ」

瞳がくすぐったそうに笑った。

「ただ・・・」

瞳が少し不安げに呟いた。

「ん・・・」

「明日からうまくやって行けるのかって思うと不安になる」

幸は呆れたように瞳を見つめた。

「うまくいくわけないよ」

「そんなはっきりと・・・」

「瞳姉さんの意思はともかく、一年近く、姉さんは家庭を捨ててしまっていたんだよ。亭主はもう離婚してしまおうかと思いつつも、息子のこと、そして姉さんの実の母親のさ、娘は必ず心を入れ替えて帰ってくるからって懇願でもってさ、なんとか、その日を過ごしているわけだ。亭主はともかく、母親は怒ってわめきたてるぜ」

「そ、そんな・・・」

「地べた、頭擦り付けてもさ、謝りなよ。まったくの他人じゃない、追い出されはしないよ」

「はい・・・」

「追い出されなきゃさ、時間をかけて、努めて家族を四人で創っていけばいい。瞳姉さんなら大丈夫だよ」

幸はそっと笑顔を瞳に浮かべると、瞳の手を両手で握った。

「大丈夫だよ」

「やっぱり、幸ちゃんは神様ですよ。私も神棚に写真供えよう」

「それだけ言えば大丈夫だよ、瞳姉さん」

幸はカルアミルクを飲み干しお盆に戻す。

「姉さんち、隆君の壁に描いたいたずら書きやたまったゴミで大変だ、母親もへたばっている。今なら居場所があるよ、ここで散々、掃除や日常の細々としたことやったろう、役に立つよ」

「箒で床を掃いたり、雑巾で柱を拭いたり、へとへとになったけど、あれは」

「別に予行練習のためにやったんじゃない、結果として役に立つだけのこと。穢れを落として行くには、転換させるには、なにもさ、特別な呪文もなにもいらないんだ。ただただ、一所懸命、掃除すれば勝手に落ちて行く、それだけのことだよ」

「そうだったの」

「潔癖症にはなっちゃいけない、ただ、掃除という形で、芥を払っていけば、それで良い」

「ありがとう、でも、なんだか」

「ん・・・」

「年下の幸ちゃんの方がずっと年上で経験豊富に思えてきた」

「私もお父さんの娘になるまで色々あったからさ」

「それはいま尋ねてもいいこと・・・」

「私的にはかまわないけど、姉さんはそれを問うたこと、悔いと思うよ」

「それは多分、尋ねてはならないことなんだろうね、それじゃ訊かない」

「ありがと。やっぱり、瞳姉さんは分別のある良い人だね。お父さんから瞳姉さんに武術だけは教えなさいって言われて、どうかなと思ったけど教えて間違いなかった」

「え」

「姉さんの性根が真っすぐだってこと」

「武術ってのは体と精神を一つにするための技術。精神が体に寄り添うための手法でもある。瞳姉さんはこれから、自分自身と家族を護らなきゃならない、これは抽象的な意味でもあるし、具象的でもある。そのためにはさ、挫けない強さが必要になる、武術はそれを教えてくれるよ」

「なんだか、どう言えばいいんだろう。一から体の動かし方、歩き方、お箸の持ち方まで覚え直した気がする」

「瞳姉さんに教えた武術は私がお父さんに教えてもらったものに加えて、女性の動きに適した工夫を加えている。役に立つよ。まだ、途中だから週一くらいで教えに行くかな」

「来てくれるの」

「行くよ。っていうか、もう何度かお邪魔しているけどね。そうじゃなきゃ、さすがにあたしでも瞳姉さんちのことわからないよ」

「え・・・」

「いじめが原因で不登校になった高校生、でも、しっかりしなきゃって、健気にも学校に行こうとしている女の子、ふと、重そうに荷物を運んでいるお婆さんの鞆を持ってあげたことから心の交流が始まる。泣ける話さ」

「私のお母さんがそのお婆さんなの」

「明日は先に私が瞳姉さんちに行くから、その後から来てくれればいい、少しは、敷居を下げておくよ」

ふと瞳が溜息をついた。

「とても私には恩返しできそうにないよ」

「そんなものは破片ほどもいない。あたしはさ、父さんに初めて会った時、その父さんを殺そうとした。そんなあたしを父さんは娘として受け入れてくれて、不自由なくここで一緒に暮らしてくれている。武術や呪術はもちろん、生活の中での立ち居振る舞い、日常生活、料理の仕方まで教えてくれた、料理失敗しても美味しいって食べてくれる・・・、あたしはもう、父さんに申し訳ないやら、嬉しいやらで一杯だ・・・。だからさ、あたしは父さんにだけはとびきりの良い娘でいたいし、瞳姉さんや、手を重ねた人には幸せになって欲しいと願っている。それだけのときさ」

幸は涙声になり、そのまま俯く。

「お父さん、幸はお父さんが好きです。とっても・・・、とっても、愛しています。とっても、大切です。いつまでも、いつまでも、一緒にいてください。お願いします。お父さん」

そのまま、ごろんと幸は横になってしまった。

「月の夜はだめだ、饒舌になってしまう。ああ、お父さん・・・」

幸は小さく小さく泣き出した。

「幸ちゃん」

瞳はどう言えばいいのか分からず、布団にくるまってしまった幸に戸惑ってしまった。

幸がいきなり布団から立ち上がる。

「限界だ。ちょっとさ、お父さんの寝顔見て来る」

「え、あ・・・、うん」

男はふと目を覚まし、台所で明かりを消したまま、お茶を飲んでいて。月明かりが台所内を仄かに照らし、さほどの不自由はない。月見の季節ではないが、団子のひとつでも買っておけば良かったと思う。

「お父さん、ここにいたの」

「ん、幸、どうしました」

「だって、部屋にいないし、どうしたのかって」

「ちょっとね、2、3分かな、お茶飲んでた。なんか、ありましたか」

「え、ううん、なんでもない」

「幸、おいで」

男は少し笑みを浮かべると幸を手まねいた。

男の隣りに座る。男は幸の目許を人差し指で拭った。

「泣いていたな、瞳さん、帰っちゃうの寂しいのか」

「そんなんじゃないよ。寝ぼけただけだよ」

「幸は泣き虫さんだ」

男が小さく笑う。

幸はそっと男の肩にもたれ掛かった。

そして、男の湯飲みを取ると一口飲む。

「ちょっと薄い」

「濃いとね、眠れなくなりそうだからさ」

「お父さんは寂しくない。明日、幸、夕方までいないよ」

「寂しいなあ。でもね」

「ん」

「幸が計画したこと、それを頑張ろうとするのが、なんかね、嬉しくて、誇らしいからさ。父さん、寂しくても大丈夫さ。そうだ、写真、飾って、うまくいくようにって拝んでおくよ」

「そういうのはいいよ、もお。八百屋のおばあさんにもしっか言わなくちゃ」

男はくすぐったそうに笑うと、幸の頭をなでる。

「さあ、もう寝なさい、父さんももうすぐ寝るからね」

幸は立ち上がると男の後ろに立ち、男の頭をなでた。

あなたと暮らし始めてからわかったことがあります。

どんなことですか

楽しいという気持ち、嬉しいという気分、自身が幸せあるという事実  
実は、私も君と過ごすようになって、それらのことを知ったのです  
素直に云います、幸せにしてください、ありがとうございます  
こちらこそ、ありがとうございます。君は私も幸せにしてくれたのですよ  
ありがとう・・・、嬉しいです

「幸はお父さんに頭をなでられるのが好き、とっても気持ちがいい。お父さん、頭、なでられる感想は」

「初めて頭なでられた。なるほど、いい気分、なんか、気持ちが優しくなって来る」  
幸はにっと笑うと、男の肩に体を寄せ、少し回り込んで口付けをする。

「おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

幸はそっと自分の部屋に戻った。

男は考える、もしも、二十代、せめて、半ばまでに見つけ出せていれば、俺は幸を娘としてではなく、妻として向かえることが出来たのではないか。いや、しかし、俺の二十代は、まさしく鬼と呼ばれた時代、何も考えず、幸ごと切り刻んでいたかもしれない、そう、なにもかも。思うだけでも恐ろしいことだ、この歳で出会えて良かったのかもしれない。

「幸ちゃん、御機嫌」

「え、そうかな、そんなことはないよ」

「顔が笑ってる」

「そうかなあ、ふふっ」

「心配して損した」

瞳は嬉しそうに布団に潜り込む幸を見て楽しそうに笑った。

「お父さん、好きな人ができたの。結婚を前提にお付き合いしていて・・・」  
深刻な顔をした幸の唇から言葉がこぼれて行く。夢ではない、現実には俺の前に幸が立っている。  
昼過ぎ、台所で珈琲を飲んだ後のことだ。椅子から立ち上がろうとしたところに、幸の告白。  
いつの間に・・・、いや、いまはそんなことを考えている場合じゃない、俺はどう答えればいい。  
何か言わなきゃならない。なんて言うんだ。

まさか、こんな言葉が幸の口から出るなんて思いもしなかった。俺は、俺は・・・。  
俺は幸の父親だ。そう、幸の父親なんだ。

「その相手の人は普通の人」

「え・・・、あ、うん」

「そっか、良かったね」

「お父さん、幸、いなくなってしまうよ、寂しくない」

男は努めて笑顔を浮かべ、優しく言った。

「とっても寂しくて哀しい。でもね、これは娘を持つ父親が通らなきゃならない道だ。それに幸は普通の道を歩いて行く方がいいんだよ、その方が幸せだよ」

男はふらつきそうになるのを堪え、立ち上がった。

「ごめん、ちょっとね、部屋に戻るよ」

「お父さん」

「心配しなくていい、ちょっとびっくりしただけだから。音楽でも聴けばね、すぐに落ち着くからさ」

男は少しふらつきながら、部屋へと戻った。

静かな音楽をかけ、仰向けに寝転がる。

結婚なんてだめだ、幸はずっと父さんと一緒にいるんだ、本当はそう言いたい。ああ、なんて醜いことを俺は思うのだろう、情けない。

自分の手を見ても、冴えない中年男の手だ。こんな俺が幸に懸想してどうする。ましてや、自分の娘にだぞ。落ち着け、俺の一番大切なのは何だ、幸が一番大切だ。幸がこんな世界から抜け出すためにも、普通の人と普通に暮らして行くのが一番良いんだ。

そうだ、これが一番良いんだ。

男はうつ伏せになると、低く低く声を押し殺して泣く。蹲るようにして、泣き続けた。

少し辺りが薄暗くなったころ、幸が部屋の外から声をかけた。

「お父さん、晩ごはん作ろ、ね」

男は幸の声に気づくと、努めて落ち着いたように答えた。

「なんだか寝てたよ。すぐ行くからさ、台所で待っていてくれるか」

「うん・・・」

足音が離れて行く、男は部屋の灯りをつけ、窓に映った自分の顔を見つめた。目が腫れてる、泣き過ぎだ、みっともないな。男は襖を開け、洗面所に向かった。

晩ごはんを食べ終え、幸はそのまま編みかけのマフラーを取り出すと、俯いたまま編み始めた。今はもう春、1月には仕上がるはずだったのだが、模様を浮き出させるのが難しいらしい。作っては解き、手間を掛けている。

「良い色だね、柔らかいクリーム色だ」

「うん、でも、難しいよ」

「そうだな、根気がいるね」

俺はなんてつまらないことを言っているんだ。男は自身に絶望を感じつつ、ふと窓から外を見つめた。

白い月が虚空に輝いていた。

そうだ、教えておかないと大変なことになる。

「幸、庭にいいかな」

幸は手を止めると、マフラーを下ろした。

二人は裏庭に出た、梅の森だ。臘梅をはじめ、幾種類もの梅が無数に森を成し、競うようにその花を咲かせていた。裏庭は男とその父親が作り出した異界に繋がり、無限に広がる森を形成していたのだ。

見上げれば真っ白な月が天蓋に浮かぶ。

「幸、父さんの前に立ちなさい」

「はい」

男の前に幸が立つ。

「両方の手を上げて、その手のひらを月に向けなさい」

幸は男の言うままに両手を月に向けた。

「月の光を体に取り込む」

男は幸の後ろに立つと、幸の両肘を両手で支えた。男が静かに息を吸い込む、男の手が白く光り出した。それは月の光と同じ、ひそやかな色だった。

「光の通路を作るよ」

幸の腕が手のひらから肘まで、白く光り出した。

「どんな感じがする」

「腕の中をさらさらと水が流れていく」

男は頷くと、両手を放し、一步、退いた。

「今度はその感覚を肩まで伸ばしなさい」

男の言葉に幸の腕全体が白く輝きだした。男は自分自身が半年近くかけて身につけたこの修法が一度で幸がこなしてしまったことに驚嘆を憶えた。

「自分の両手を見てごらん」

「なんだか、白く輝いて、腕が蛍光灯になった感じ」

「蛍光灯ですか・・・」

男は少し笑うと、幸の前に回り込んだ。

「両手を重ねて、お臍の上に置く、お腹の中に光が入っていくように」

指先を通して幸のお腹の中に光が入っていく、そして、光が消えた。

「それでいいよ。あのな、父さん、ね。外神、あかねちゃんの時のホテルでさ、幸にえっちなことした、謝ってなかった、ごめんな」

「あれは幸が・・・」

「父さん、とってもさ、えっちな気持ちになってたんだ。幸、体が干切れるように痛かっただろう」

「うん・・・」

「あれはね、父さんのえっちな気持ちが伝わって、意識外のところで幸が恐怖を感じたせいだ。長い間の苦痛がそうさせるんだろう」

幸は驚いて目を見開いた。

「幸、月の光は、少なくとも体だけはさ、その痛みや傷を防いでくれる、お腹の中に蓄えておきなさい。そうすれば、幸もお母さんになれるからね」

男は幸から離れると、梅の木に背を預けた。

「部屋に戻りなさい、まだ夜は寒い」

「お父さん、あの、あのね」

「ごめん、幸。今日の父さんはとってもだめな奴だ。でも、明日には普通に戻るから、それまでね、一人でいたいんだ、ごめんね」

「お父さん、幸はそんなつもりじゃなくて」

「大丈夫だよ、明日にはけろっとしているさ。それに幸が普通の女の子になったら、お父さんは忙しくなる、幸や幸の家族をこちら側からの干渉から守らなきゃな。父さん、とっても強いからな、安心しなさい」

幸はぼろぼろ泣きながら呟いた。

「字は「無」。その姿を捉えたもの、いまだなし。ただ、一陣の風止みし時、切り裂かれた魔物、地に落つる。それ、お父さんでしょう。幸、知ってるよ」

男は手を梅の幹に重ね、息を吐く。閃光が走り、月の光が爆発した、白い輝きが梅の森を駆け巡り、森が一瞬、真昼になる。

「ああ、懐かしい名前だな。幸のためなら、父さんはとっても強くなるよ」

光が消え、森は夜に戻ったが、男が背を預けた梅の木だけが、やわらかな燐光を残り火のように放っていた。

「でも、今晚だけは怠けさせてくれ」

男はずるずると梅の木に背を預けたまま座り込んでしまった。

「明日になれば祝福するからさ」

幸はぼろぼろと涙を流しながら、男の元へ歩き寄る。

「お父さん、お願い、幸を捨てないで」

「何言ってるんだか。幸が父さんのとってもね、大切な娘であることは変わらないさ」

「お父さん、あれ嘘だよお、幸の好きな人はお父さんだけだよ。結婚なんか、しちゃだめって言うってくれるかなあって思っただけだよ。お父さん、幸から離れないでよ」

男はその言葉に目を見開いたまま、幸をじっと見つめた。

「そっか・・・、良かった」

「お父さん、ごめんなさい」

男はふっと笑顔を浮かべた。

「今からでも良いかな」

「え・・・」

「幸は結婚しちゃだめ。だって、父さん、幸と二人っきりで、ずっと一緒にいたいからさ」

男はふふっと笑うと、左手を幸に向けて伸ばした。

「おいで、幸」

幸は駆け寄ると、男に思いっきり抱きついた。

「痛ったた・・・。頭の後ろ、梅の幹にぶつけてしまったよ」

「えへへ、ごめんなさい」

「泣いた女の子が、もう笑った・・・。なんだか、幸は笑ってくれている方がいいな。泣いている幸も可愛いけどね」

「もう、幸、お父さんには嘘つかないよ」

「いいよ、嘘ついててもね。全て、信じてあげるさ」

男はふっと力を抜くと、梅の梢を見上げた。

「桜も良いんだけどね、はらはらと花びらが落ちていくのがね、少し寂しい。梅の方が好きだな。頑張るさ、花を落とさずにいようとしてくれるからね」

男はそっと幸の頭をなでる。

「幸は華奢な女の子だけど、父さんの心の中の、ほとんどを占めているよ。ああ、見上げればおぼろに光を放つ、満天の梅の花、父さんの心の中と同じだな」

「お父さん、もう少し、こうしていようよ」

「風邪ひくぞ」

「大丈夫だよ、お父さんはとっても暖かいから。とっても暖かいよ」

「父さんは幸専用の湯たんぽだな」

男は指に幸の髪を絡めると、ほっとしたように笑顔を浮かべた。

花見と言っても、桜の花を愛でるといような風情はない。所狭しと屋台の並んだ先、公園を一歩入れば、満開の桜が青い空をその無数の花びらで見事に遮ってしまう。

しかし、一度、視線を落とせば、ビニールシートの青が辺り一面、賑やかな花見客が持参する小さな空にあちらこちらと埋め尽くされている、まるで、空にいるようなものだ。

男はビニールシートの端に座り、缶ビールを少しずつ飲んでいて。商店街の花見、幸がしばらく前から、週に一度、魚弦で1時間ほどだが、手伝うようになり、そのよしみで男も商店街の花見に参加したのだった。

「先生が来てくれるなんてびっくりだよ」

洋品店の女店主が男の前で笑った。しばらく前に膝を痛め、折り畳みの座椅子にすわっているのだが、それが正座する男の背の高さにあい、ちょうどいい話し相手になっていた。

「私も、こう賑やかなところは初めてですね」

男は笑顔を浮かべると、缶ビールを横に置いた。

「昼下がりの暖かな日です、見上げれば桜色の空」

「いいねえ、贅沢だ」

女店主は笑うと重箱に詰めた巻き寿司を一つ食べる。柔らかな日差しが心地よい。

「幸ちゃんもすっかり元気になったねえ」

「幸はしっかり働いていますか」

「佳奈ちゃんの横で声張り上げているよ」

「良かった」

「先生は幸ちゃんのことになると、ほんと、うぶな少年みたいな顔になるねえ」

「この齢で少年と言われても褒められた気にはなりません」

「褒めちゃいないってことさ」

女店主は声を出して笑うと、重箱を男に差し出した。

「今年はおたしじゃなくて、娘が作ったからさ、少し甘すぎるけど食べてみなよ」

「ひとつ、いただきます」

男が一つ巻き寿司を食べる。

「美味しいですよ、娘さんというと、お姉さんの方ですか。確か、妹さんは、どちらでしたっけ、嫁ぎ先が遠かったような」

「妹の方は結婚して正月くらいに、ちょっと顔を見せるくらいさ。姉は結婚もせずぐずぐずしているからさ、巻き寿司でも作りなって言ってやったんだよ」

男は笑って頷くと、もう一ついただきますと巻き寿司を食べる。

「先生さ」

「はい」

「姉の方の涼子をさ、嫁にもらってくれないかねえ」

男は笑いながら、首を横に振った。

「この齡で結婚は勘弁してください。もう元氣もありませんし、幸との二人暮らしが板に付いてしまいました。今は二人でちょうどなんですよ」

「でも、幸ちゃんもずっと先生と一緒にというわけにいかないだろう、その内、好きな男連れてくるじゃないかい」

「どうなんでしょうね、来たらどうしましょう。虚勢を張って物分かりのいい親父を演じるか、それとも、聞きたくないと逃げ出すかな」

男がほんの少し溜息を付く。

「先生、幸ちゃんに惚れてるんじゃないかい」

「そうかもしれませんね」

女主人が呆れて笑った。

「相思相愛だねえ」

「え」

「昨日、幸ちゃんと珈琲飲みながらさ、言ってたよ。自分がお父さんのお嫁さんになるってさ」

「それは、なんて嬉しいこと」

男が笑う。女主人も釣られて笑った。

ふと女主人は真面目な顔になって男に言った。

「幸ちゃんからあの話は聴いたかい」

「ああ、商店街のイメージガールとかいうのですよね」

男は笑みを消し、缶ビールを一口飲む。

「幸は絶対嫌だ」

女主人の肩を揉みながら、幸が言い切った。

「わっ、びっくりした。幸ちゃん、いつの間に」

幸はにっと笑うと、それには答えず男に言った。

「お父さんも嫌だよ」

「そうだな、あまり目立ち過ぎるのは良くない。週一でお店を手伝わせてもらうくらいでちょうどいい」

幸はほっと安堵の表情を浮かべる。

「母さん、幸にも色々ね、事情があるのさ」

幸は女主人に笑いかけると、今度は首の後ろ辺りを柔らかく揉み出した。

「母さん、気持ちいいかな」

「なんだか、背中が軽くなっていくようだねえ」

「母さんは少し猫背、もっと胸を張ってえらそうにしてください。お喋りはとつてもえらそうなんだから」

「はは、幸ちゃんに叱られた」

女主人が気持ち良さそうに笑う。

「ね、お父さん、デートしよう。せっかくの桜だもの、恋人同士は桜の下で愛を語らなきゃ」

「父さんは愛よりも食い気だな、屋台が気になってしょうがない」

男はすっと立ち上がるとブルーシートから降り、靴を履く。

「母さん、行ってくるよ」

「ああ、いっといで」

幸は女主人に笑顔を浮かべると、男を追って走りだした。

二人が出掛けた後、ふっと佳奈が女主人のところにやって来た、商店街の大所帯、人が多く、二つに別れて花見をしていた、男どもが騒いでいるのは一つ向こうのブルーシートだった。そして、佳奈は男共の酒の世話をしていたのだった。

「おつかれさん。なんだか、向こうは賑やかだねえ」

佳奈はお茶を一口飲むとほっと一息ついた。

「男は女を召使いか何かぐらいにしか思っていないんですよ」

「男なんてそんなもんさ、昔、亭主もそうだったねえ。大酒飲んで、女房こき使うのが、男の甲斐性のように言ってたもんだ」

佳奈は頷くと、一つ、巻き寿司を食べた。

「美味しいです」

「涼子に作らせたのさ。まあまあって感じだね」

「涼子ちゃん、もう随分、見ていないですよ。確か、学校の先生でしたよね」

「教師もこの頃は忙しいらしいよ。あたしですら、たまにしか顔を見ていないんだ」

女主人は一つ溜息を付き、ビールを開けた。

「さっき先生にね、涼子を嫁に貰ってくれって言った」

「うわっ、それで・・・」

「躊躇なく断られてしまった」

「そりゃそうですよ。先生、幸ちゃんに恋愛してますもん、で、先生、生真面目だから、そんな自分を許せないというか、感情を抑え込んでいますから」

女主人がにやっと笑った。

「純な男は少しばかり苛めたくなるねえ」

「人が悪いなあ。でも、面白いですけどね、そういのは」

「ただ、問題は親子だってことだ。最近は世の中が変になってか、親子ほどの年齢の差の夫婦も珍しくはないけど、でも、本当の親子ではねえ」

「大丈夫ですよ、だって、本当の親子じゃ・・・。うっ」

女主人が驚いたように目を見開いて佳奈を見つめた。

「それじゃ・・・、男共の様子を見て来ます」

立ち上がりかけた佳奈の裾を女主人がしっかりと捉えた。

「待ちな。そういう面白い話は最後までしておくれ」

「うわあ、佳奈さん、喋っちゃった」

「どうしました」

男は隣りを歩く幸に話しかけた。

「あのね・・・、前にね、佳奈姉さんに買い物付き合っただけで、ちょっと喋っちゃった」

「なんて」

「あの、あのね。お父さんは本当のお父さんじゃない、だから、幸はお父さんを一人の男として愛することができるって。・・・ごめんなさい」

「それを、いま、佳奈さんが洋品店の叔母さんに喋ってしまったってことか」

男はくすぐったそうに笑った。

「戻ったら、どんな顔して出迎えてくれるかな」

「お父さん、怒らない」

「どうして」

「だって」

男は少し笑うと立ち止まった。

「ちょっとビールでね、父さん、酔ってしまっているのかもしれない。だからかな、それが楽しく思える、不思議だな」

「お父さんは酔っ払いだ」

幸は笑って男の腕を抱きかかえた。

ただ、心配です、あなたのことが

私のことですか

はい、あなたの日常を崩してしまうやもしれません

私の日常は

私がいることで商店街の皆様とあなたの中に諍いが生じれば大変なことになります、ただ、私が皆様の希望をお受けすれば、きっと、たくさんの人達に私の存在が知られ、良くないモノ達が現れるようになります

さて、まず、何から申し上げますでしょうか

はい

私の日常、それは君が私の隣りに居てくれること、それが私の大切な日常なのです。それ以外の日常は私にはあり得ません。そして、君がたくさんの人達に祭り上げられるのは、昔、君が人身御供になったことと、私には重なるのです。だから、私はどうしてもそれを認めることができないのです。

君が思う以上に、私には君が必要なのですよ、君がとても大切なのです。

あなたは本当に私を大切にしてくださいます、私はあなたにどれほどのものをお返しできるでしょうか。

もしも、かなうなら。

はい

いつまでも君の隣りにいさせてください。それだけが私の願いです。  
わたしのようなもので良ければ、必ず。

「そうだ、お父さんにいわなきゃ、って思っていたことがあるんだ」

幸は見上げると、にっと笑った。

「何をです」

「幸は一杯勉強しているよ、昨日、DNAの本を読んだんだ」

「遺伝子とかだったかな」

「幸はお父さんから体をいただいた、つまり、お父さんと幸のDNAは同じってことだよ、一卵性双生児みたいに、普通の兄妹や親子よりも、ずっとずっと近い存在なんだ。これは幸にとって、とっても嬉しいことなんだ、お父さん、手を出してみて」

幸は男の左手を取ると、自分の掌の指紋と見比べる。

「あ・・・、指紋は違うなあ」

「指紋まで一緒というなら同じ人になってしまうよ、幸は幸という個性なんだからね」

男は笑顔を浮かべると幸の手をそっと握った。

「幸の手は柔らかくて優しい感じがするよ」

男は手を離すと、自分自身の掌を見つめた。

「父さんの手はざらざらだ」

男は笑うと後ろ手に両手を組む。

「それがお父さんの個性なのです。幸は好きだよ」

「つまりはだよ、先生は幸ちゃんが商店街のイメージガールにならないほうがいいと言ってる、で、幸ちゃんも絶対嫌だと言っている」

「本当の親子じゃないってことは秘密ですよ、誰にも言わないでくださいよ」

「大丈夫さ、あたしゃ、佳奈ちゃんよりずっと口が堅いさ」

女主人は笑うと、腕組みをして考える。

「そうか、駆け落ちだな。これは」

「変なこと考えないでくださいよ」

「いやいや、つまりはだ。先生と幸ちゃんは相思相愛、惚れあっている。しかし、親子ほどの年齢の差、幸ちゃんの本物の親が認めるはずがない、で、二人、駆け落ちをした。しかし、ここで、商店街のイメージガールなんてことで盛大に顔を出したら・・・。うん、面白い、なんかわくわくするね。先生も人畜無害な顔してるくせにやることはやるもんだ」

佳奈はどう収めればいいのか、思い浮かばずうろたえていた。

「よし、あたしゃ、応援するよ。二人を添い遂げさせてやろうじゃないか。一肌も二肌も脱いでやるよ」

「あ、あの、おばさん」

「ん」

「あの、えっと、あの二人は、多分、ですけど、こういうどっちともつかずの状態を楽しんでいる、と思うんですよ」

「そりゃ、どういいことだい」

「恋愛中というか、そういう、なんていうのかなあ、甘酸っぱい時代を楽しんでいるというか」

「しかし、先生もいい齢だよ、っていうか、いい齢なんかとっくに過ぎちまってるよ」

「でも、幸ちゃんにとっては、今のこの関係が」

女主人は、うーんと唸り考え込んだ。

「そうだねえ、なにも女が男に合わせなきゃならないわけじゃない。幸ちゃんには、まだまだ、楽しむ時間が必要なのもかもしれないね」

「そうですよ、幸ちゃんもあの齢で主婦やらせるのは可哀想ですよ」

「しょうがない、当分、見守ってやるだけにするかねえ。うん、ほら、噂をすればだ」

佳奈が振り返るとタコ焼きの包みを両手に幸が駆け寄って来た。男はお好み焼きの袋を持っていた。

どうしよう・・・、佳奈は一人呟いた。

「母さん、佳奈姉さん、ただいま。タコ焼き、食べよう。お好み焼きもあるよ、リンゴ飴も」  
男もブルーシートの荷物を置くと、

「それじゃ、ちょっと」

「あれ、先生、どこに」

「あちらで、ちょっとお喋りして来ます。佳奈さん、幸の相手してくれないかな」

「あ、あの。先生」

男はにっと佳奈に笑いかけると、もう一つの宴会場へと向かった。

「どうしたの、佳奈姉さん。顔色悪いよ」

げげんな顔をして、幸は佳奈に尋ねた。

「あ、あの・・・、喋っちゃった」

「なにを」

「えっと、あの」

幸は笑みを浮かべると、すっと人差し指で佳奈の唇に触れた。

「言わなくていいよ。幸は佳奈姉さんが好きなんだからさ」

手を離し、幸は女主人に話しかけた。

「母さんは歩くとき、膝を突き出すように歩く、だから膝を痛める」

幸は女主人の前に座ると、両手を女主人の膝に重ねた。

「母さん、膝全体が暖かくなってきましたでしょう」

「なんか、膝の中が柔らかくなっていくようだ」

幸は手を離すと、立ち上がり、女主人の両脇に手を差し入れ立たせた。

「手を離すよ」

幸が手を離す、女主人は信じられないと自分の膝に触った。

「ぜんぜん痛くないよ、いや、以前より調子が良いくらいだ」

「でも、今までと同じ歩き方をしたら、また、膝を痛めることになる。ゆっくりとね、ちょっと、膝を伸ばし加減にして、足の裏、全体で地面に着くように歩くといいよ」

幸は笑うと、タコ焼きとお好み焼きの袋を開けた。

「いっぱい買ってきた、みんなで食べよう」

「大将、俺は感謝しているよ。幸が魚絃さんにお世話になってからさ、人見知りもなくなってね、本当にありがたいと思っている、でも、それだけは勘弁してくれないかな」

「先生、なにもたいしたことじゃなくてさ、商店街で作るポスターのまんなか、幸ちゃんに大きく笑顔で写ってくれればいいんだけなんだ」

男は困ったように笑顔を浮かべた。

「少しばかり事情があってね、幸を写真とかにね、写されたくないんだよ」

魚絃は腹を括ったように男を睨んだ。

「それは先生のエゴってもんじゃないかい」

「いや、事情があるんだよ、簡単に話せるような理由ならいいんだけど、詳しいこと、言うわけにいかないんだよ」

「みんな言ってるぜ」

「何をかな」

「先生が幸ちゃんを溺愛して、無理やり、そのなんだ、男と女の間隙を作って、幸ちゃんを苦しめているってな」

「ん・・・、それは誤解だ。確かに大切な娘だからさ、愛しているって言っても間違いじゃないけどね。それは噂や妄想が一人歩きしているだけだよ。幸が働いていてさ、そんな陰があるかい、無理強いされてそうに見えるかな」

「それは・・・」

「頭下げろよ、今回の話はなかったことにしてくれよ。頼むからさ」

「こっちこそ頼むよ、先生。俺ら、もう決めたんだ、これで行こうってな」

いつの間にか、商店街の男たちが男と魚絃を中心に車座にすわっていた。

「息子が大学へ行くんだ」

魚絃の隣り、金物屋。

「大学のな、入学金があるんだ、もうけなきゃならないんだよ。あの子が商店街に来てから売上があがってんだ。なんとか、ここでどんと儲けたいんだよ」

後ろからパン屋。

「近くにできたスーパーから客を取り戻すんだ、そのためにはポスター作って、幸ちゃんに商店街のテーマソングを歌ってもらうんだ」

男は小さく溜息をつく。

魚絃が駄目押しに、男に言った。

「商店街で先生に帳簿つけてもらっているのは、俺んちも含めて半分以上だ。それがなくなったら先生も辛いんじゃないかい」

男は寂しそうに笑うと立ち上がった。

「ここは引き下がらせてもらうよ」

男はブルーシートから出、靴を履いた。

「先生、わかってくれたのか」

魚絃が大声で言った。

「いや、明日にでもね、預かっていた書類、全部返すよ。俺は娘が最優先なんだ」

「馬鹿野郎」

罵声に、男は哀しそうな笑顔を浮かべ背を向けた。

「お父さん、どうだった」

幸が齒にアオノリを付けたまま、戻って来た男に話しかけた。

「予想どおりだった」

「そっか……。ごめんね、お父さん」

「あの、うちの亭主、先生に失礼なこと言ってなかったかな」

「ん、大丈夫だよ、佳奈さん。なんだかな、幸も佳奈さんも齒にアオノリがついている」

男はくすぐったそうに笑った。

「や、やだっ」

あわてて幸はお茶を飲んだ。

「先生、まあ座りなよ」

「いえ、今日はこれでお暇します、急ぎの用事ができたものですから。幸、膝はどうだった」

「膝の半月板修正と軟骨の増強、母さん、普通に歩けるよ」

「それは上々」

男は笑うと背を向けた。幸はあたふたと靴を履き、男にしたがった。

「それじゃね、佳奈姉さん、後片付けお願い。母さんも気を付けてね」

幸はにっと笑いかけると、男を追って駆け出した。

二人の姿が人込みに紛れ消えて行く。

「先生って何者なんだい」

女主人が呟いた。

「え……」

「まるで普通の人間じゃないように見えた」

「へんなこと言わないでくださいよ」

「初めてだ、先生の後ろ姿が透けて見えたような気がしたんだ」

「そんなことあるわけじゃないじゃないですか」

「そ、そうだね」

女主人は落ち着こうと、お茶を飲む。

「は、あれ、あたしゃ惚けちまったのかい」

女主人が叫んだ。

「佳奈ちゃん、先生の名前、名字はなんていったっけ」

「え、それは、それは・・・」

佳奈は自分も男の名が思い浮かばずにいるのに気が付いた。何だったろう、事務所の看板を思い出してみる、封筒に印刷された名前を思い出そうとする、下の会計事務所は思い出せるのに、どうしてだろう、始めから知らなかったかのように、男の名字が思い出せない。

「叔母さん、先生のところ、行って来ます」

「なんだか変だ、頼んだよ」

「はいっ」

佳奈はあたふたと靴を履くと駆け出した。公園を飛び出す、公園の入り口には何件もの屋台が並んでいる。

辺りを見渡す、たくさんの人だ。

とにかく、先生ちへ行こう。

しかし、佳奈は立ちすくんでしまった。そして、力が抜けたように、膝をついて、しゃがみこんでしまったのだった。

「先生ち、何処だったろう」

呟いた。なんで、先生のところ、思い出せないんだ、今まで、幸ちゃんと先生ちでお茶を飲んだり、それから書類の控えを持って行ったりしていた、道が分からないなんて、そんなことあるはずがないのに。

佳奈は人目もはばからず叫んだ。

「先生、幸ちゃん」

「どうしたの、佳奈姉さん」

振り返ると、幸が両手に屋台で買ったお好み焼きの袋を持って立っていた。

「あ、あの、あのね」

「あ、姉さん、涙出てるよ、もう、しょうがないなあ。お父さんは徹夜で書類を仕上げなきゃって帰っちゃったし、幸はさ、晩ごはん用にお好み焼き買ってたんだ。」

幸は少しかがむと、佳奈の目許を袖で拭った。

「佳奈姉さんは大人なのに迷子だ」

幸は笑顔を浮かべると、佳奈を立たせた。

「先生の家が分からなくなった」

「それはしょうがない。お父さんは幸を守るために、商店街の人達との十年間の縁とこれから先を切ってしまった、幸は、まだ佳奈姉さんや母さんと縁が繋がっているから、こうして会えるし、お喋りもできる」

幸は寂しそうに笑みを浮かべた。

「佳奈姉さん、お父さんの家を思い出そうとするのじゃなく、幸の家を、幸の家の場所を思い出

そうとしてごらん」

佳奈がほっとした顔をする。

「思い出せたみたいだね。しばらくはあの家にいるから、佳奈姉さん、遊びに来て。楽しみにしているから」

幸が歩きだそうとするのを、佳奈は両手でしっかりと止どめた。

「お願い、幸ちゃん。これじゃ、納得できないよ」

「困った・・・」

幸は背を向けたまま呟いた。

「場所を替えよう」

そう幸が呟いた途端、人の姿がすべて消え、全くの無音となる。取り残されたように屋台だけが立ち並ぶ。

「ここは」

「違う次元の世界、この世界には佳奈姉さんと幸の二人っきりだ。誰も聞き耳を立てる奴はいないから安心なんだ」

幸は屋台に設えられた丸椅子に座る、両手の袋を屋台の軒先に置いた。

「佳奈姉さん、お喋りしよう、隣り、どうぞ」

幸が優しく笑みを浮かべる、佳奈はほっとしたように幸の隣りに座った。

「すべて話すかな、でも何から話せば良いのかな」

幸は少しうつむいた。

「そうだね、幸のこと、そして、幸とお父さんの関係から話ししてみるか」

「幸ちゃんのこと」

「うん、正直に話すよ」

「ありがと」

佳奈が呟いた。

「佳奈さんは人の心を聞く。例えばね、誰もいないのに、いないはずなのに声が聞こえたことはないかな」

「今はほとんど無いけど、子供の頃は多かった」

「手を見せてみて」

幸は囁くと、佳奈の手を取り、手首を見る。

「守髪（もりがみ）が入っている。これはお父さんの父親の髪だ、縁があるのかな」

幸は自分の髪を一本抜くと、佳奈の手首に巻く。その髪は手首の中に融けるようにして消えてしまった。

「覚えているかな、子供の頃、男の人にこんなふう到手首に髪を巻いてもらったこと」

「そうだ・・・、思い出した、小学生の頃、法螺貝持ったしゅけんじゃ。いきなり目の前にやって来て、自分の髪を毛を抜いて、あたしの手首に巻いた」

佳奈はそっと笑みを浮かべた。

「もう大丈夫だよって言って、そのまま去って行ったんだ」

「佳奈姉さん、良かったね。幸はさ、出会えなかったんだ、そういう人に」

幸は笑みを浮かべると、視線を外し少し俯いた。

「声の主は、妖怪、あやかし、魔物、或いは祟り神と呼ばれている奴らだ。声を聞いてしまえば引かれて食われてしまうよ」

「本当にいるの、そういうの」

「いる、でも、佳奈姉さんは大丈夫だ。幸の守髪はそんな奴らを微塵も寄せ付けない」  
にっこりと笑うと幸は佳奈の手を握った。

「あたしのいたところは・・・、ううん、幸のいたところは迷信深いところでね、祟り神を畏れ敬っていた。幸は霊媒体質で、心の声も聞く、ついでに随分と美人だ、きっと神様もご満足いただけるだろうと人身御供、生け贄にされたんだ。」

「そんなことが今でも・・・」

「百年以上昔の話さ。あたしは祟り神の腹の中で百年、生きていた、つまりもう人間じゃなくなっていた。あたしは祟り神に使役されていた、男を女の魅力で引き込んで、そいつを祟り神に食わせる、餌みたいなものだ」

幸は佳奈から手を離すと、空をぎゅっと睨みつけた。

「そんなことが本当にあるの」

「現実を一步踏み違えて、穴に落ち込んだら、そういう奴らが口を開けて待っているのさ」  
幸はふっと息を漏らすと佳奈に笑いかけた。

「信じてくれる、佳奈姉さん」

「信じるよ、第一、こんなさっきまでたくさんの人達がいたはずの桜の公園が、本当に今、幸ちゃんと二人っきりになっているんだから」

「ありがと」

幸は小さくふふっと笑うと嬉しそうに言った。

「お父さんに会ったのは、およそ二年前。いつものように男を引き込み、体売って、祟り神に食わせる餌になって、そう、いつものように・・・」

「お父さん、違ったんだ。あたしが裸でベッドにいるんだぜ、どんな男でも理性なくしてむしゃぶりついてきた。でも、お父さんは世間話をするんだ。そして、祟り神が正体を現わした時、あっけないくらいあっさり、奴を退治して、あたしを助け出してくれたんだ」

「でもね、あたしは既に人間じゃない、奴と一心同体みたいなものだった、だから、あたしも死んでいくしかなかったんだ」

「そのとき、お父さん、こう言ってくれたんだ。生きることを選びなさい、私の命を半分あげようってね」

幸は呟くように言うと、自分の手のひらを見つめた。

「この体も血も命も、お父さんに半分分けていただいたもの。この体にはお父さんと同じ血が流れているんだ」

「だから、幸ちゃんはお父さんが好きなの」

「それも、でも、本当に女としてあの人に惚れたんだ。もう、あたしには親も姉弟もいなか

った、救い出してもらっても行くところなんかなかった。あの人はそれなら私のところに来なさい。年齢的にも親娘でいいでしょうって言ってくれた。あたし、今なら妻にしてくださいって言ってたかもしれない」

「一緒に暮らすようになってね、幸せになりなさいという思いを込めて、お父さんはあたしに幸という名前をくれたんだ」

「普段の先生からは想像がつかないよ」

「そうだよ、お父さん、もっとかっこいいところ、外に出したらいいのに。地味で正直が一番楽って言ってるんだから」

幸は少し声を出して笑う、とても幸せそうな声だった。

「ただ、お父さんにはとても迷惑かけた。佳奈姉さんに初めて声をかけてもらった時」

「背中向けてうずくまってたね」

「大きな声がとても怖かったんだ、だから、佳奈姉さんに声をかけてもらってとても嬉しかった」

佳奈が照れ臭そうに笑う、まるで少女のような幼い笑みだった。

「お父さんのところに来た頃、いつもはね、人が怖くてね、おとなしくしているけど、たまに、なんだか不安で一杯になって、もうわけ分からなくなっていて、大声あげて意味の分からないこと喚き出したり、障子やふすまを破ったり、硝子割ったりもした。もう、自分自身がどうしようもなくなるんだ、そして最後には部屋の隅でうずくまってぶるぶる震える」

「お父さん、一度も怒ったことないんだ、抱き締めてくれて一緒に泣いてくれるんだ、もう大丈夫だよ、ここは幸の場所だ、安心していいんだよって、繰り返し言ってくれる。そして、こんなこと言うんだよ。棚がつぶれたりして大変だなあって思うけど、板買って来て、こう、鋸で切る、その時、幸が板の片方をしっかり押さえてくれているのを見ると、親子っぽくっていいなあなんて」

「そう、嬉しそうに言ってくれる、幸の心はとろとろになる。ああ、もう、お父さん、大好きって思ってしまうんだ」

「ただ・・・」

幸は微かに視線を落とした。

「お父さんは自分が死んだ後のことを考える、幸が一人でも生きて行けるように考える、お父さんは凄い武術使いで、映画に出て来るような魔法使いだ。お父さんは全ての術を幸に教えてくれた。どんな敵にも勝てるように。そして、たくさんの友達が出きるようにも考えてくれた、佳奈姉さんにこうしてお喋り出きるのもそうだし、いろんな友達や知り合いもできた、幸一人じゃ、到底できなかった」

幸はふっと顔を上げ佳奈に言った。

「幸はとても美人だろう、性格はともかく」

「うん、見れば見るほど完璧な美人だと思う、性格は・・・、だけど」

「微妙な言い回し、ありがと。でもね、結局は、美人ってのが問題なんだ。この美人ということで、神様が喜ぶだろうと生け贄にされた、そして、今は商店街の男達が売り上げ向上を狙って幸を御輿に載せようとする」

「亭主もその話になると眼の色変わっていた。何考えているんだ、こいつって思ったよ」

「幸は一度魔物にさらわれた身だ、魔物を引き込みやすい体質になってしまっている、その上、そんな思いが膨れあがっていくと、いろんな妖しい奴らが近づいてくる。いろんな面倒ごと、不思議なことが増えていく、その内、みんな頭が固まってしまって、もう助かるにはこれしかないって幸は妙な神様に捧げられてしまうのさ」

幸は沈んだ表情になると少し猫背になり頬杖をつく。そして、ひたすら前方を見つめた。

「顔に傷をつければ、こんなことはなくなるだろう。ざっくりと頬にでも切り傷をつければいい」

佳奈は幸の沈んだ声に驚いた、幸の表情を長い髪が隠している。

「でも、この体はお父さんにいただいたもの、この体には絶対に傷をつけない」

ふっと幸は背伸びをすると大きく深呼吸をした。

幸は佳奈に笑顔を向けた。

「佳奈姉さんにはとっても大切にしてもらった、幸のこと、気にかけていただいた。だから、幸のこと正直に話したんだ」

「どう、答えればいいのかわからないよ。話が重すぎて」

佳奈はひとつ溜息をつく、幸を見つめた。

「お姉さん、幸ちゃんの頭、なでて上げるよ」

「うん、ありがと」

佳奈が幸の頭をなでる。

「幸ちゃんはえらいよ、がんばった」

「うふふ。頭、撫でられるの好き」

そして、幸は立ち上がると佳奈の後ろに立ち、そっと佳奈の頭を撫でる。

「気持ちいいでしょ」

「いいね、気持ち良い」

「佳奈姉さん、今回のことで、大将たち男を怒っちゃだめだよ」

「殴ってやろうかと思う」

「それはだめ。もともと男なんてガキで我が儘な種族なのさ」

「先生も」

「お父さんは別、だって、幸のお父さんだもの」

佳奈は愉快地笑った。

「あ、お父さん、引き返して来た。元の世界に戻るよ」

その一言で、二人の回りにはたくさんの人達が行き交う公園入り口の前に世界は姿を替えた。

「お父さーん」

幸が男に声をかける、男は笑顔で手を振った。

「遅いからどうしたのかと思った」

「幸が襲われたと思った、誘拐されたって思った」

「いや、幸が誰かを襲ってんじゃないかとひやひやした」

「わっ、ひどいな、それ。幸は優しい女の子なのにさ」

幸が佳奈に同意を求める。

「幸ちゃんはかわいい、かわいい」

「感情がこもってないよ」

佳奈が愉快に笑う。

「ほんと、良い子だ」

男がすまなそうに笑った。

「佳奈さんには迷惑かけて申し訳ない」

「本当に男ってのはどうしようもないバカタレだよ」

「はは、返す言葉がないよ」

「先生、聞きたいんだけどさ」

「なんだい」

「あたしらは友達かい」

「ああ、共通の特技を持つ友達だ」

「これからもかい」

男は柔らかく笑顔を浮かべた。

「もちろん、これからもね」

「安心した、これが一番の安心だよ。先生は嘘だけはつかないからさ」

男がくすぐったそうに笑う。

「いい人だよ、佳奈さんは」

男がそっと幸の頭に手をやる。

「佳奈さん。幸は佳奈さんを本当に自分の姉のように慕っている、これも縁というやつなのかな。我が儘なところもあるだろうけど、これからもよろしく頼むよ」

「ええっ、幸は我が儘じゃないよ。自分の意見を優先するだけさ」

「楽しい妹だ。飽きないねえ」

「それじゃ、佳奈さん、帰るよ」

「母さんも一緒に来てね、仲間はずれにすると叱られちゃうよ」

「ああ、そうするよ」

佳奈は小さく溜息をつき笑顔を浮かべた。

男が少し会釈をする、背を向けようとしたとき、佳奈は思いだしたように言った。

「先生」

「ん・・・」

「あのさ、言いにくいんだけどさ・・・、怒らないでよ。先生の名字や名前なんだっけ」

「うわ、ひどいなあ。十年以上のつきあいだよってね」

男はポケットから名刺入れを取り出し、ペンで名前を書き込んだ。

幸がその名刺を取ると、佳奈に手渡した。

「由緒のありそうな名字に名前だ、似合わないね」

「ああ、だから、誰にも教えなかったのさ。初めて人に教えたよ」

「えっ・・・」

佳奈が顔を上げた瞬間、男の姿がふいっと薄れそのまま消えてしまった。

「本当にお父さん、魔法使いでしょう。恥ずかしがり屋のね」

「うわあ、面白いねえ」

「それじゃあね、必ずだよ」

「ああ、明日にでも行くよ」

「楽しみにしてる」

幸は一瞬、寂しそうな表情を浮かべたが、にっと笑うと手を振り駆けだした。

幸の姿が人影に消えるまで佳奈はそのまま見送る。

ふいに佳奈はしゃがみこむと、小さく溜息を漏らした。

先生や幸ちゃんに行くのもありなのかなあ、そんなふうにも思う。

でも、子供の顔を思い浮かべると、あいつらをしっかり育てなきゃって思うし、蹴っ飛ばしてやるのかという亭主だけど、あれでいいところもある。

あ・・・、泣いているのかなあ、涙出ていないのに。

「どうだったい、佳奈ちゃん」

「あ、おばさん」

女主人が駆け寄って来た。

「遅いからどうしたんだと思ってね」

佳奈は立ち上がると、少し笑った。

「幸ちゃんが明日、遊びに来てって言ってましたよ」

「そうか、会えたかい。良かった」

「本当に膝、大丈夫になったんですね」

「前より調子いいくらいさ。ん・・・」

女主人が佳奈の顔をのぞき込む。

「泣いてんのかい」

佳奈はなにも言わず、女主人にしがみつくと小さく小さく泣きだした。

おとうさん

ん、どうしました

幸はなんだか割り切れない複雑な気持ちだ、こんな変な気持ち初めてだよ

哀しいとか、楽しいとかね、人の気持ちってのは、そんな単純に表すことはできない

哀しくて楽しかったり、相反する気持ちがいろいろ混ざり合っただけ人は苦しむ

つまりは、幸が一人の人として成長したってことだ

人になるっていいことばかりじゃないね

そうさ、でも……。本当に嬉しいなあってこともあるからさ、たまにはね。

終わり

あとがきとこれから

---

友人に勧められ、なんとなく書き始めまして、最初の一話だけで済ませるつもりが、ついつい十話までとなってしまいました。こんなに続くのなら、もうちょっと、それっぽい題名を付けておけば良かったなと思っております。

さて、次作 「異形 流堰迷子は天へと落ちていく」

男と幸の一年後から始まります。

お読みいただければ幸いです。

<http://p.booklog.jp/book/4337>

0329日記帳 <http://p.booklog.jp/book/4491>

こちらに小説の更新情報など載せています。

「異形 流堰迷子は天へと落ちていく」

「異形 雨夜閑話」

も、どうぞ、よろしく。

## 挿し絵のお願い

---

このページをご覧いただけているということは、一通り、お読みいただけたということかなと思っております。

お読みいただきありがとうございました。

さて、ページのタイトルにもございますように、どなたか、無償で挿し絵を描いていただけないだろうかと思っております。

やはり、文章だけよりも、挿し絵があった方が賑やかで良いなと思うのです。

なにぶん、無料でご提供しているお話なので、挿し絵代をお支払いすることは出来ませんが、それでも良いということでしたら、挿し絵を描いていただけないでしょうか。

アダルトっぽいもの、また、著作権を侵害していそうなものは困りますが、縦横300pxくらいまで、私宛にメールにてお送りいただければ、あまりにもちょっと・・・、ということであれば、文中に入れさせていただこうと思います。

来月、8月一杯まで募集しております。

どうぞ、よろしく願いいたします。

なお、挿し絵の諸権利は描かれた方にあると、私は判断しております。ただ、見栄えのため、縦横、同じ比率で縮小することがあるかも知れませんこと、ご注意くださいませ。